

令和2年度

卒業論文

消えゆく看板を追って

—長岡市与板町の消火活動用せき板と人々の認識についての研究—

長岡造形大学

造形学部 建築・環境デザイン学科

環境計画・保存コース

指導教員：北雄介助教

172004 伊藤 崇宙

内容

1.	はじめに	4
1.1.	研究の背景	5
1.1.1.	与板の消火活動用せき板との遭遇	5
1.1.2.	与板の人々の認知	7
1.1.3.	新潟県長岡市栃尾地域の消火活動用せき板	7
1.2.	研究の目的	8
1.3.	既往研究（先行研究）と本研究の位置づけ	9
1.4.	本研究の構成	10
2.	与板の消防設備・せき板についての調査	11
2.1.	与板町の概要	12
2.2.	調査概要	13
2.3.	与板地域内のせき板の設置箇所	15
2.4.	与板の消火システムとせき板の概要について	25
2.4.1.	せき板の使用手順	25
2.4.2.	消火システムについて	28
2.4.3.	せき板の設置経緯について	33
2.4.4.	せき板の現状について	33
2.4.5.	せき板の今後について	36
2.5.	せき板についての概要まとめ	36
3.	与板の人々のせき板への認識についての調査	38
3.1.	人々の与板のせき板に対する認識	39
3.2.	人々の与板のせき板に対する認識についての調査	39
3.2.1.	調査内容	39
3.2.2.	調査結果の分析と考察	40
4.	与板のせき板の今後の展開可能性を考察するためのアクションリサーチ	42
4.1.	街歩きワークショップによるアクションリサーチの概要と目的	43
4.2.	『きえるかんぱんマップBOOK』の制作	44
4.2.1.	めざす目標	44
4.2.2.	完成した内容	46
4.3.	街歩きワークショップの開催	50
4.3.1.	当日まで	50
4.3.2.	ワークショップ当日の流れ	51
4.3.3.	フィードバック	57
4.4.	アクションリサーチ全体の分析と考察	58

4.5.	今後の展開可能性.....	61
5.	まとめ.....	63
5.1.	せき板の現状と認識についてのまとめ	64
5.2.	地域色と市町村合併についての考察.....	65
6.	付録.....	66
7.	参考文献.....	81
8.	謝辞	82



1. はじめに

1.1. 研究の背景



写真1 鉄板に「消」と印字された看板状のもの

1.1.1. 与板の消火活動用せき板との遭遇

新潟県長岡市与板町（以下「与板」）の街の中には、写真1のような鉄板に「消」と印字された看板状のものが街の至る箇所に設置されている。筆者は2019年の10月より与板にて「ヨイタタンサケイカク」¹という街歩き・地図制作プロジェクトに参加しており、その活動の中で発見し、その特異な姿と存在感に興味を惹かれた。路上観察学会で知られる赤瀬川原平²は、不動産に付属した美しく保存されている無用の長物を超芸術トマソン³と呼んだ。筆者は与板で発見した写真1のものに対しても同様の魅力を感じたのである。

プロジェクトにて制作した、与板の街のあやしさ（怪しさ/妖しさ）を可視化し伝える街

¹ <https://yoitatan sakeikaku.net>

² 赤瀬川原平・南伸坊・藤森照信（編）：路上観察学入門，筑摩書房，1986.

³ 赤瀬川原平（著）：超芸術トマソン，筑摩書房，1987.

歩き地図「よいたあやしいまっぷ」⁴⁵の中では写真1のものを「あやしいモノ」の一つとして掲載し紹介している。(写真2) 加えて、プロジェクトの活動の一環として筆者が自主制作を行った映像作品「アニメヨイタくん」⁶の作中においても写真1のものをフィーチャーし、その存在を周知させようとした。



写真2 よいたあやしいまっぷ



写真3 映像作品「アニメヨイタくん」

⁴ 栗原 清多,伊藤 崇宙,内田 夢乃,久保田 章斗,小山 倅平,砂長 玲南,北 雄介『街歩きを通じた、地図のテーマ設定とデータ収集「よいたあやしいまっぷ」「よいたかわいいまっぷ」製作プロジェクト (その1)』(日本デザイン学会 第67回春季研究発表大会、2020年)

⁵伊藤 崇宙,栗原 清多,内田 夢乃,久保田 章斗,小山 倅平,砂長 玲南,北 雄介『街の雰囲気や印象を伝える地図のデザイン「よいたあやしいまっぷ」「よいたかわいいまっぷ」製作プロジェクト (その2)』(日本デザイン学会 第67回春季研究発表大会、2020年)

⁶ <https://youtu.be/l5lXUHdBih8>

1.1.2. 与板の人々の認知

与板以外の地域では（少なくとも筆者は）見たことのない写真1のものについて、「よいあやしいまっぷ」制作にあたり開催したワークショップ等で、どういった目的で設置されているものなのかを現在与板在住の方々に尋ねてみた。ところが大半の方は知らない様子であり、明確な情報を得ることはできなかった。のちに消防団に所属している方に「消火活動時に水路にせきをして水を確保するために用いる板だ」という事を教えていただいた。

1.1.3. 新潟県長岡市栃尾地域の消火活動用せき板

消火活動において、消火栓や防火水槽等の人工水利とは別に、河川や農業用水等の自然水利を使用するために水路をせき止めるということはある。一般的に土嚢や板が用いられるが基準は無く、板に関しては地域ごとに形状や使用方法、名称が異なる。

新潟県長岡市栃尾本町周辺を例に挙げる。刈谷田川と支流の西谷川に挟まれたこの地域は、織物工業や農業といった水を必要とする産業が古くから発達していること、多雪地域のために流雪溝として使用することから、市街地には用水路が張り巡らされており豊富に水が流れている。それら用水路には板を差し込むための溝（写真4）が、近くの住宅の外壁には鉄製の板が立て掛けるようにして配置されている。（写真5）



写真4 せき板を差し込むための溝



写真5 栃尾本町に見られるせき板



図 1

新潟県長岡市新尾本町周辺にある消火活動用せき板の位置をプロットした地図
Google Earth ストリートビューによる調査であり、完全な地図ではない。

一方、与板のせき板はただの鉄板ではなく、「消」の文字とそれを囲う円が白いインクで印されている点、それが住宅の壁などに立て掛けられるのではなく、専用の支柱に掛けられて設置されている点が特徴であると言える。

1.2. 研究の目的

こうした独自の姿をしている与板地域のせき板だが、それらには最近使用されたような痕跡や様子は無く、錆による劣化が進行し放置されているといった状態である。実際、ある箇所のせき板は、GoogleEarth ストリートビュー⁷の 2012 年の写真では存在が確認できるが、2019 年 10 月に現物を確認したところ、鉄板が撤去され支柱のみの姿になっていた。

⁷https://earth.google.com/web/search/%e4%b8%8e%e6%9d%bf%e7%94%ba%e4%b8%8e%e6%9d%bf/@37.54160909,138.81049008,20.71837997a,0d,60y,317.28406689h,78.84648403t,0r/data=CnoaUBJKCiUweDVmZjUwMDI5ZWY5M2EzNjE6MHhmNTEyNjhhOTExNmVjZjAxGcxWAZnNxEJAIVyN7ErLWWF AKg_kuI7mnb_nLrkuI7mnb8YASABliYKJAmMR8x8MdxCQBGmgmhAR19CQBmrjYDqwX9hQCFXy6o6fS9hQClaChZCb2cwOVbWVHowYkViMXVhTnIt3BBEAI

(写真6) 与板在住の人々の大半が設置目的や用途を知らず、認識もされていない。このままでは与板のせき板はひっそりと街から姿を失いかねない。



写真6

(左) Google Earth ストリートビューより (画像取得日 2012/10)

(右) 2019 年 10 月に筆者が撮影した同一のせき板

今後万が一全て撤去され街から消え失せたとしても、与板のせき板についての研究を通して普及活動を行い、かつ論文を発表することでせめて与板の人々の記憶と、記録だけでも残すことができるのではないだろうか。願わくば与板のせき板の地域性と文化的価値が見直され、保存活動が行われる端緒となるのではないかと筆者は考えた。

本研究の目的は、与板の消火システムについての調査を通して「与板の消火活動用せき板」についての記録を行うこと、加えて人々のせき板に対する認識の調査をアクションリサーチの手法を取り入れつつ行い、「与板の消火活動用せき板」の今後の可能性について考察を行うことである。

1.3. 既往研究（先行研究）と本研究の位置づけ

消火活動の際に用いるせき板についての研究は、筆者が探す限りこれまでに存在していない。特に与板の消火活動用せき板に関しては、与板町史など各文献にもせき板についての記載は見受けられなかった。本研究は消火活動用せき板についてと、与板の消火活動用せき板についての初の研究である。

フィールドワークを通して現代の社会現象や都市の風俗世相を調査・記録し研究するという今和次郎の提唱した考現学⁸のアプローチは、本研究における初期調査の部分で参考に

⁸ 赤瀬川原平（著）藤森照信（編）：考現学入門，ちくま文庫，1987.

した。また、本研究のテーマの起点は、与板地域の街の中に点在する消火活動用せき板に筆者が興味を抱いたというところにあり、そうした街や外部に存在する独特な、一見製作意図の分からない物品に着目するという行為は考現学から派生した路上観察学と同様であり、本研究における与板の消火活動用せき板は言わば「トマソン」の概念に近い。

松村真宏⁹は「人とモノと環境との関係を再構築するための方法論」としてフィールドマイニングという言葉进行定義している。居住者にとっては日常生活に溶け込んでおり、意識することの殆ど無いような事物に対し、意識の向くような仕掛けやイベントを施すことで新たな見方や気づきを与えその場所に対する親しみや愛着の形成を狙うという考えに基づいたもので、本研究における4章での取り組みは、その実践でありケーススタディと言える。

1.4. 本研究の構成

本論文は新潟県長岡市与板町に設置されている消火活動用せき板について、その概要を明らかにし記録、さらには与板に住む人々のせき板に対する認識調査を踏まえ、せき板の今後の活用展開可能性について考察を行ったものである。

本論文の以下の構成は次のようになっている。第2章では、与板の消防設備とせき板について、主に与板の消防関係者への聞き込み調査を基にまとめている。第3章では街頭での与板の人々のせき板への認識についての調査結果と、その分析と考察を記述している。第4章では小中学生向け小冊子の制作と街歩きワークショップの開催によるアクションリサーチについてとその結果の分析・考察からせき板活用についての展開可能性について述べている。最後に第5章で本論文での結論と考察を述べている。なお、付録として与板に現存する各消火活動用せき板についての図録と、街歩きワークショップでの参加者に回答していただいたワークシート、制作した小中学生向け小冊子「きえるかんばんマップ BOOK」を加えた。

⁹ 松村 真宏「フィールドマイニング：人とモノと環境との関係を再構築する試み」（信学技報 HIS2007-3, 13-18, 2007 年）

2. 与板の消防設備・せき板についての調査

2.1. 与板町の概要

与板町とは三島郡に存在していた新潟県の市町村の一つである。平成 15 年 1 月 1 日に隣接する長岡市に編入した。令和 3 年 1 月 1 日現在、2,279 世帯 6,132 人が暮らしている。¹⁰

西側には三島丘陵の緩やかな山林が、東側には信濃川とその支流である黒川、旧黒川が流れている。中心部には国道 403 号線が南北に通っており市街地が形成されている。国道の両脇は妻入りの建物が建ち並ぶ商店街となっており、アーケードの一部には豪雪地帯特有の雁木が今もなお現存している。

歴史としては、戦国時代に上杉謙信公の家老直江公が本与板城へ入城。その後、直江山城守兼続が与板城の城主となり活躍するなどした。また同じ頃、上杉謙信の家臣の一人で、直江山城守兼継の義父にあたる直江大和守実綱が、戦国時代に春日山より刀剣師を与板に招いたことから「越後与板打刃物」が誕生した。地場産業として発展し、昭和 61 年に当時の経済産業大臣（通商産業大臣）によって「伝統工芸品」に指定され、今に受け継がれている。

11

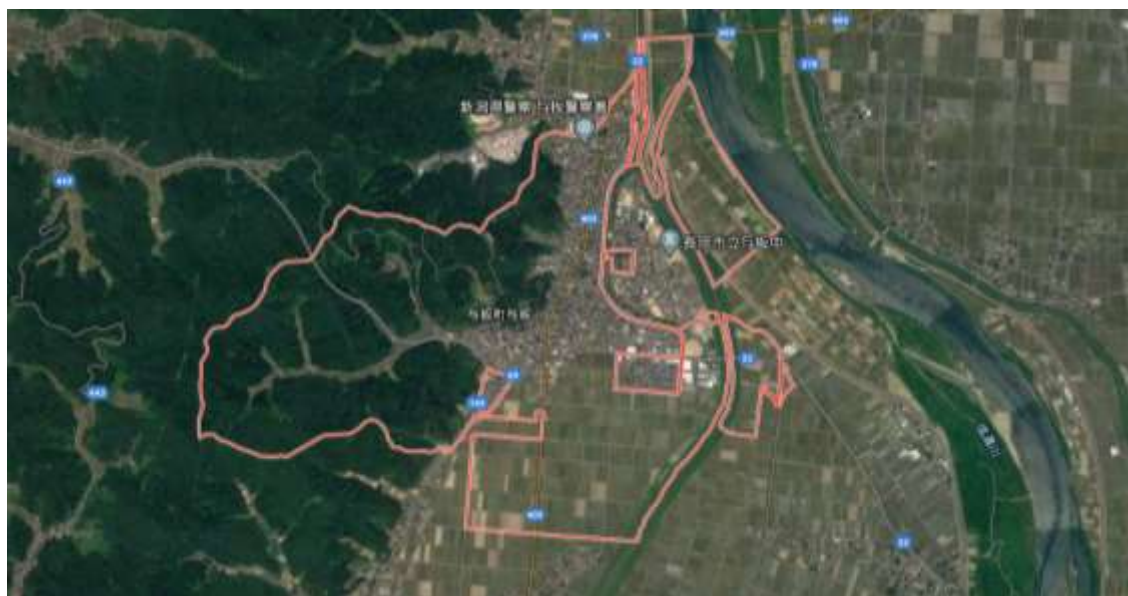


図 2 旧与板町の航空写真（Google map より引用）

¹⁰ <https://www.city.nagaoka.niigata.jp/syukai/jinkou/jinkou.html>

¹¹ <https://www.tech-nagaoka.jp/traditional/trad001/>

2.2. 調査概要

長岡市与板支所に問い合わせたものの、消火活動用せき板に関する資料は存在しないとの回答であった。また、長岡市図書館互尊文庫の文書資料室を当たったものの、同じくせき板についての書物等による記録や記述といった資料は。したがって調査は、せき板について知っている地元消防団や長岡市与板消防署、製造元といった与板の消防関係者への聞き込み調査を中心に行った。

●調査1 長岡市消防団 与板方面隊 消防団員へのヒアリング

日程：2020年6月21日（日） 9時～11時頃

対象：吉村芳秀氏（52歳・消防団員歴27年） 河内孝将氏（40歳・消防団員歴12年）

主な内容：与板の消防設備の基本概要について



写真7 長岡市消防団 与板方面隊 消防団員へのヒアリングの様子

●調査2 長岡市与板消防署へのヒアリング

日程：2020年9月1日（火） 10時～11時頃

対象：伊丹一氏

主な内容：署としての消火活動用せき板に対する見解など



写真8 長岡市与板消防署へのヒアリングの様子

●調査3 長岡市消防団 与板方面隊 元消防団員へのヒアリング

日程：2020年10月11日（日） 9時

対象：中川周治氏（61歳 昭和56年から22年間消防団に所属していた）

主な内容：詳細なせき板についての情報や与板の地形や歴史について



写真9 長岡市消防団 与板方面隊 元消防団員へのヒアリング

●調査4 せき板製造元への電話でのヒアリング

日程：2020年10月11日（日）

対象：石丸良吉氏（75歳） 実家が石丸熊吉商店という金属加工業を営んでいた商店

主な内容：せき板が製造された年代や当時の話について

またその他には、数回のフィールドワーク、長岡市消防団与板方面隊の月例訓練の見学、Google Earth ストリートビューでの調査、文献調査、街頭でのアンケート調査を行った。



写真10 長岡市消防団与板方面隊の月例訓練の様子

2.3. 与板地域内のせき板の設置箇所

長岡市与板町・本与板町に現存していると確認できたせき板（金属製 30 枚と木製 1 枚の計 31 枚）の設置箇所を地図上にプロットした。（図 3.4.5.6.7）設置箇所についてもそれを記した資料などは存在しておらず、正確な総数は確認できていない。



図3 与板地域のせき板設置箇所（堤下ため池エリア）

1



2



堤下 ため池



写真 11 堤下ため池エリアのせき板と水源

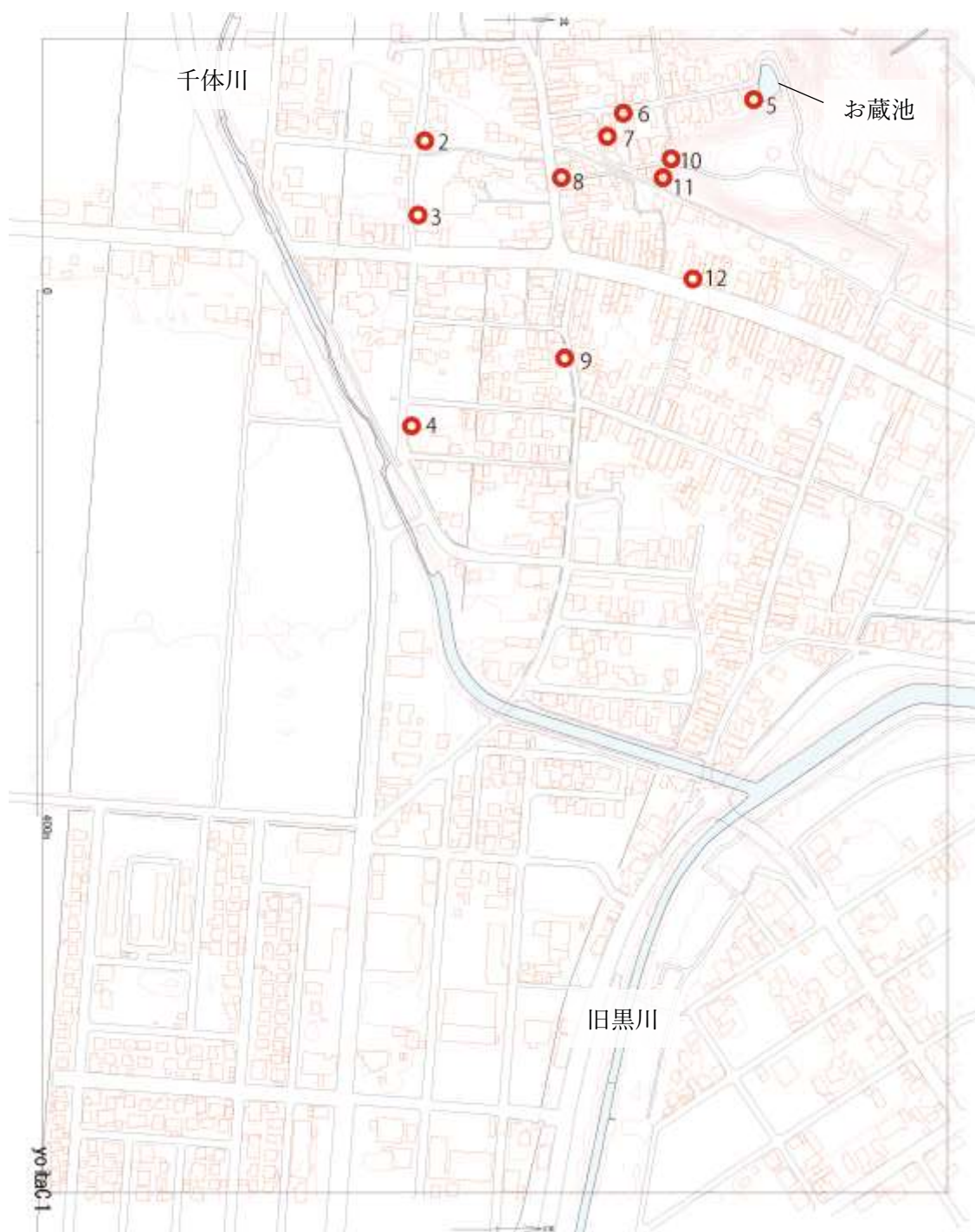


図4 与板地域のせき板設置箇所（お蔵池エリア）

2



3



4



5



6



7



8



9



10



11



12



お蔵池



写真 12 お蔵池エリアのせき板と水源

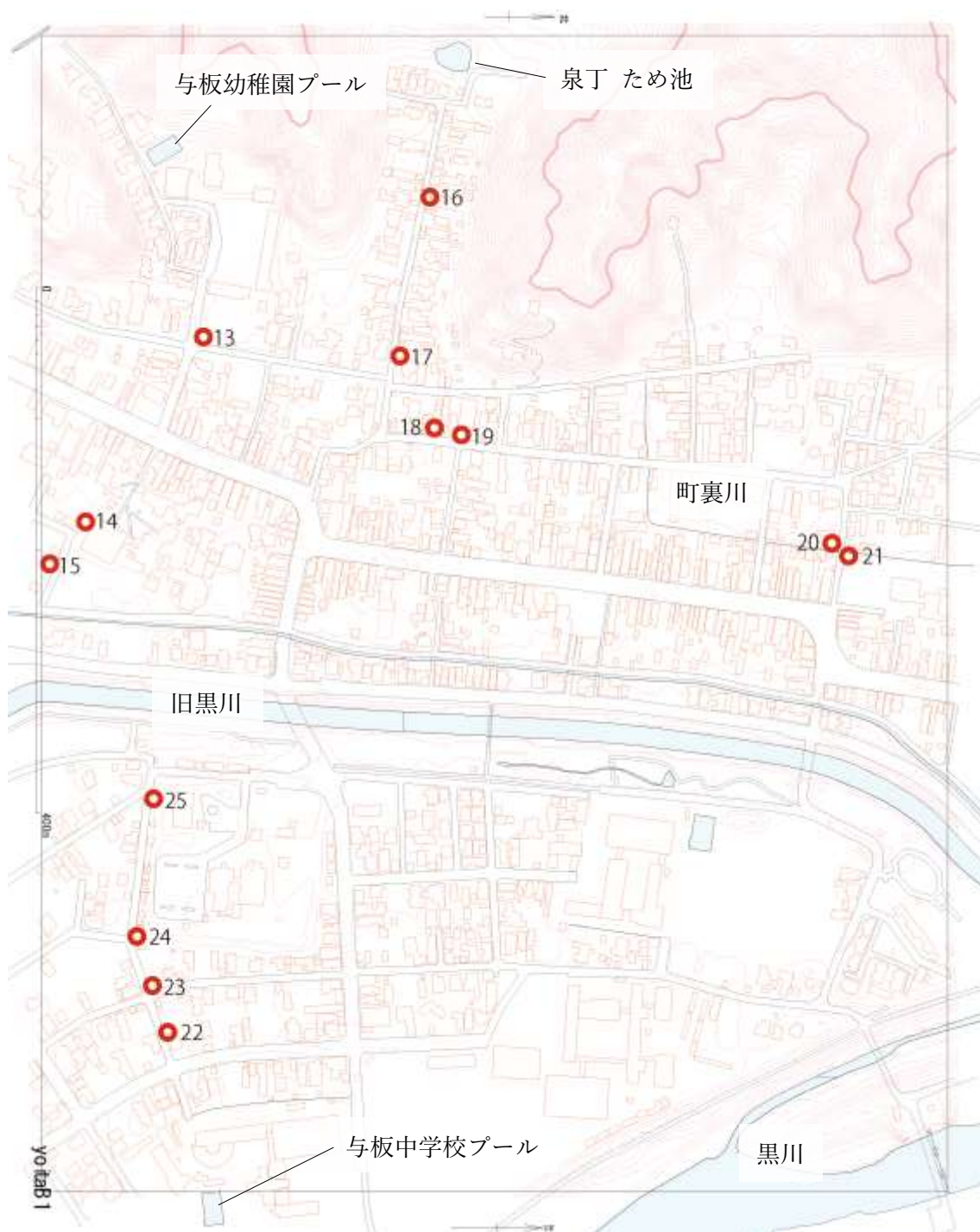


図5 与板地域のせき板設置箇所（与板幼稚園・与板中学校・泉丁ため池エリア）

13



14



15



16



17



18



19



20



21



22



23



24



25



泉丁ため池



与板幼稚園プール



写真 13 与板幼稚園・与板中学校・泉丁ため池エリアのせき板と水源



図6 与板地域のせき板設置箇所（町裏川エリア）

26



27



写真 14 町裏川エリアのせき板

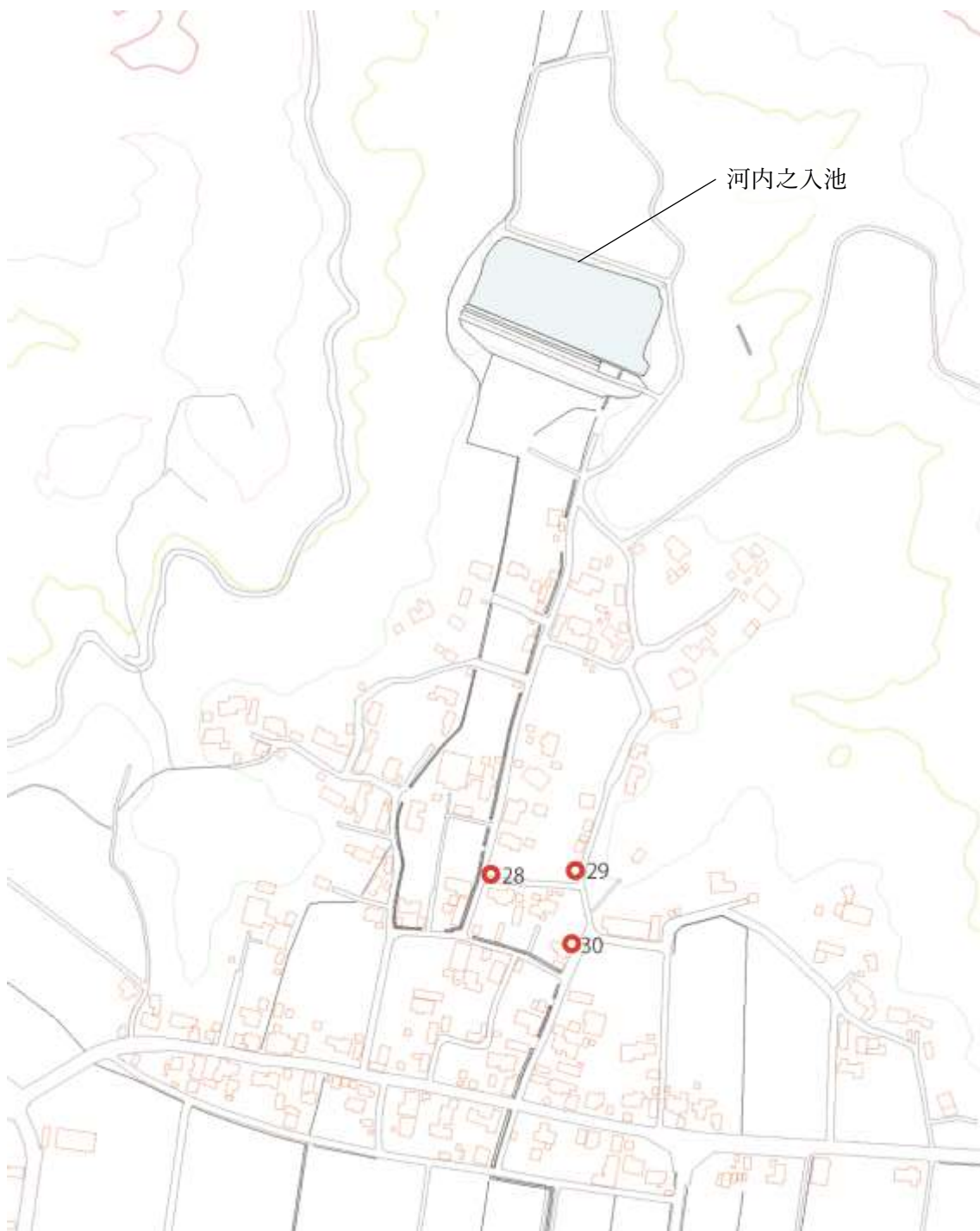


図7 本与板町のせき板設置箇所

28



29



30



河内之入池



写真 15 本与板町のせき板と水源

2.4. 与板の消火システムとせき板の概要について

2.4.1. せき板の使用手順

せき板設置箇所の側の用水路に溝が造られており、そこに差し込み水の流れをせき止め、水を確保し消防ポンプ車で汲み上げ消火活動に使用する。ただし与板の用水路には普段から一定量の水が流れているわけではない。与板の西側の山には数々の堤（ため池）が存在している。与板町史民俗編¹²によると、与板地域では古くから洪水と水不足に悩まされた歴史があり、その結果各河内や沢入りに堤を作り備えられたのだという。せき板を溝に差し込んだ後に、そうした山上の堤やため池の水門を開く、あるいはプールの水を落とし街の用水路へと水を送ることで、ようやくせき板で消火活動に十分な水を確保することができる。



写真 16 せき板を溝に差し込む様子

具体的な流れを柳之町地域を例に挙げ説明する。

柳之町周辺に設置されているせき板の水源となるのは、千体川上流にあるため池である。堤下と呼ばれる地域で、このため池は元々農業用水として用いるための水を溜めるものであった。

柳之町周辺に設置されたせき板を用いる（それらの場所まで水を通す）ためには、この池の水門を開き水を流す前に、千体川の途中にある木製せき板を使用する必要がある。この木製せき板は普段はビニールシートに覆われており、捲ると数枚の細長い木製の板が確認できる。

これらを千体川の護岸に造られた専用の溝に差し込んでおき、先述したため池の水門を開き水を流すと、せき止められ溜まった水が橋の下に造られた穴から暗渠を通して街の用水路へと流れていく。そしてようやく各所でせき板にて水を確保することができるといったシステムになっている。

¹² 与板町(編):与板町史民俗編 第一章 地域と民俗 第一節 自然と生活 第一項 地形と民俗 二 沢と溜め池 (2)堤と男ガケ pp.19-20,第一印刷所,1995.



写真 17 木製せき板

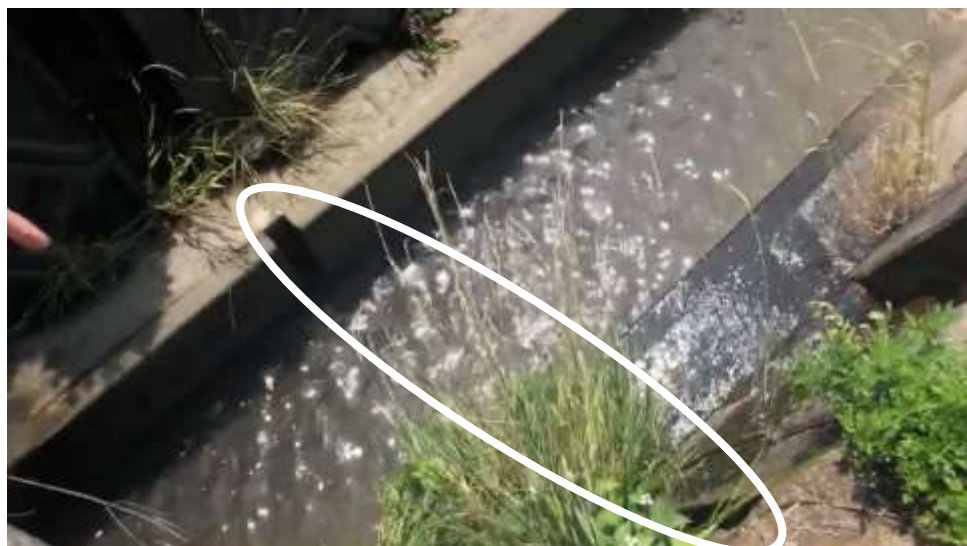


写真 18 千体川の護岸に造られたせき板用の溝



写真 19 橋の下にある穴



図8 堤下ため池が水源となるせき板の使用手順

2.4.2. 消火システムについて

こうしたせき板によって確保した水利が消火活動に使用されるのは、延焼が長時間または広範囲に及ぶような大火の場合が殆どである。消火活動では基本的に常に一定の取水が可能な人工水利を優先し使用する。

与板の消火活動では、初めに防火水槽の水が使用される。40 トン以上の水が貯水されており 40 分以上の放水が可能である。

これだけでは足りないような場合に、消火栓が使用される（消火栓は消防団による初期消火の際にも使用される）。消火栓にホースを繋ぎ、防火水槽へ水を補水する。



写真 20 与板の防火水槽と消火栓

これらの設備では水量が足りない場合に、その他の水利が使用される。プール等の水（人工水利）や、河川や農業用水等の自然水利である。自然水利の使用についてだが、必ずせき板でせき止める必要は無く、水量が十分である場合には基本的にせき板を使わずにポンプでの取水が可能である。



写真 21 消防団員が旧黒川からポンプを用いて取水・放水する様子

せき板はそれら自然水利の水量が少ないところで、一定量の水を確保するための設備である。消防団員の吉村氏は、消火活動において最も重要な点は「水を確保する」ことであ

るとおっしゃっていた。消火活動では人工水利と自然水利の両方の適切な使用とそのため
の整備が重要とだと言える。

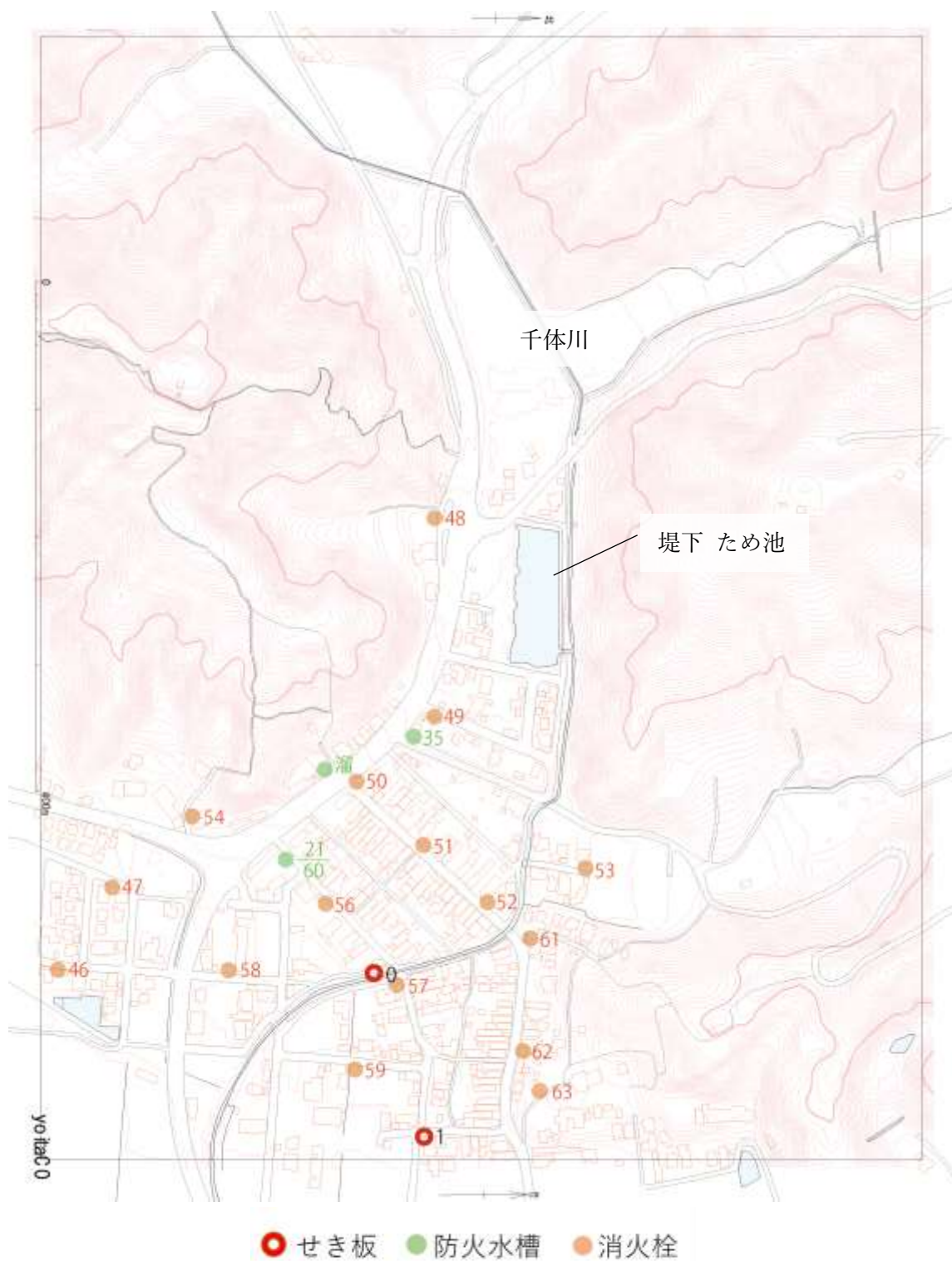


図9 図3に各消防設備を加えた図

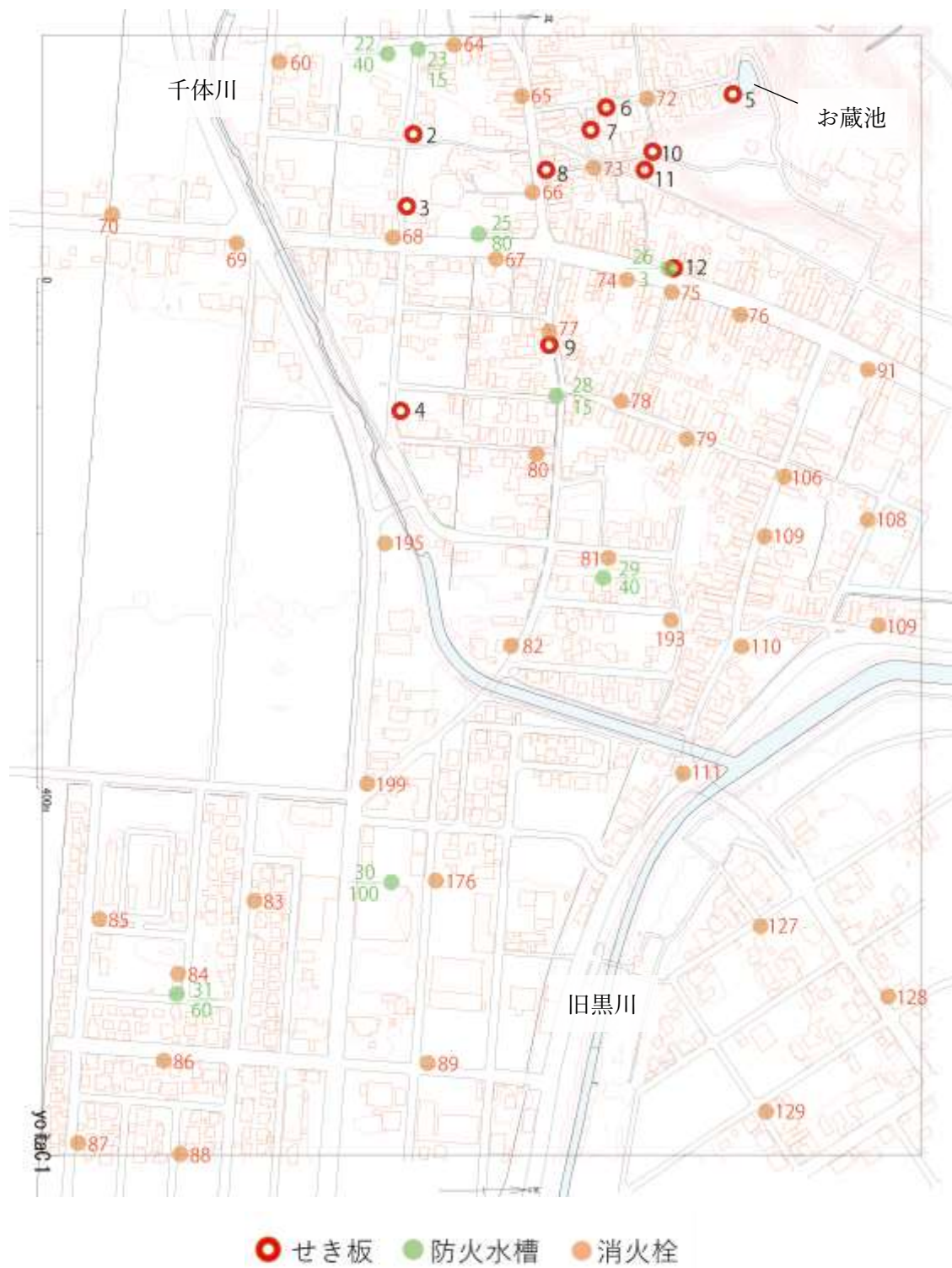


図 10 図 4 に各消防設備を加えた図

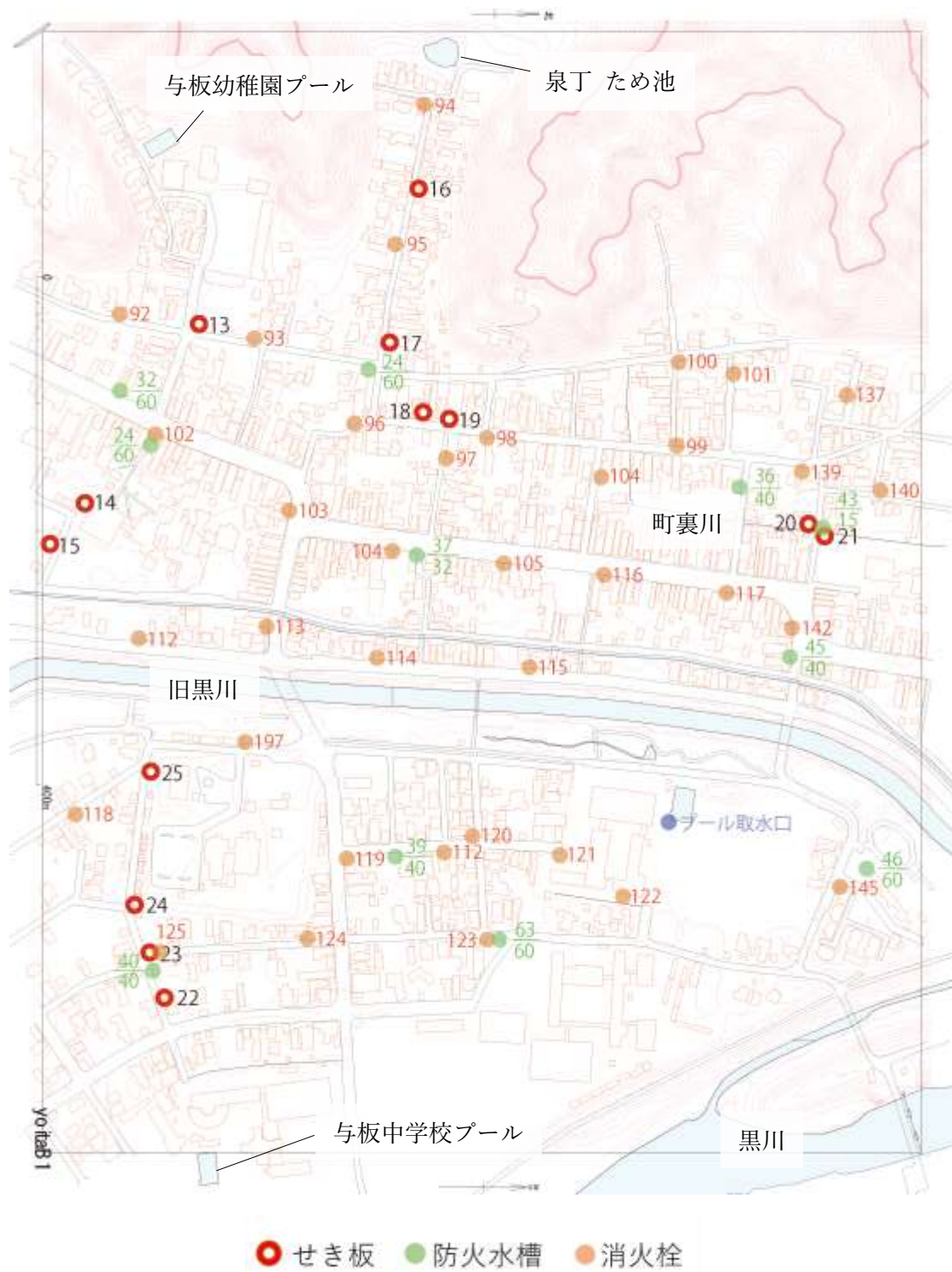


図 11 図 5 に各消防設備を加えた図



図 12 図 6 に各消防設備を加えた図

2.4.3. せき板の設置経緯について

与板にこれらせき板が設置された経緯や、記録についてだが、2.1 調査概要でも述べた通り消火活動用せき板に関する資料は存在しないため、正確な情報は不明である。元消防団の中川氏によると、昭和 40 年代頃に与板の西側の堤やため池を自然水利として有効に用いるための水路が整備され、それ以降せき板が設置されていったのだという。

署の伊丹氏によると、「与板支所に勤務していた元職員の方からお聞きした話では、消防団から与板支所へ依頼によって与板町が設置したらしい」のだという。

また、昭和 50～60 年代頃に「石丸熊吉商店」という金属加工業を営んでいた商店（新潟県長岡市与板町本与板）に消防団または消防署の人物から「商店近くの水路に設置するためのせき板を造ってくれないか」という依頼があったという話を石丸良吉氏からお伺いした。

これらのことから、昭和 40 年代に与板の水路が整備された以後、防火水槽や消火栓といった設備がまだ不十分だったことを踏まえ、消防団の有志が与板支所へせき板の設置を提案し、その後必要に応じて地域の金物店によって各せき板が制作・設置されていったのではないかと推測できる。



写真 22 石丸熊吉商店（出典:Google Earth）

また、平成 16 年 7 月 13 日の新潟福島豪雨において、与板は大きな洪水の被害に見舞われた。その後街を流れる千体川の護岸工事が行われ、その際に 2.3.1 せき板の使用手順にて述べた木製せき板は作り替えられたと中川氏からお伺いしている。状況や必要に応じて、増設や修繕を行っていったのだろう。

2.4.4. せき板の現状について

1.1 研究の背景と目的にて先述した通り、与板のせき板には最近使用されたような痕跡や様子が見られない。中川氏によると、平成 18 年 1 月 1 日に与板町が長岡市へと合併された際に長岡市からの指導で堤やため池の水が消防水利として認められなくなったのだという。その代替として与板に防火水槽等の設備が急速に整備されていった。以降堤やため池の水

は大火時にポンプで直接汲み上げることはあるが、水門を開き水を流し、各所でせき板を用いてせき止めることはしなくなったのだという。

平成 15 年に起きた与板町与板乙 971（写真 23）での火災では、柳之町の防火水槽を使用したが消し止められず、千体川脇の木製せき板を止め堤下の池の水を落とし、溜まった水をいくつかのホースを繋ぎ消防ポンプ車で汲み上げて放水し火を消し止めた。これが堤下のため池の水を落としせき止め消火に使用した最後の事例ではないかと中川氏からお伺いした。



写真 23 与板町与板乙 971

一方で現消防団員の吉村氏によると、数年前に中町で発生した長時間に及ぶ住宅火災では、お蔵池の水を流しせき板を用い水を汲み上げ消火活動を行ったという。明確にせき板の使用が禁止されている訳ではないようである。

このようにせき板の使用に消極的になっていった中で、少しずつせき板の存在や用途を知る人物が少なくなったと考えられる。1.1 研究の背景と目的にて先述した、撤去されたせき板や、板は残っているものの側溝の改修工事により幅が合わなくなり嵌らなくなってしまったせき板などはこうした状況下で生まれたのではないだろうか。

また、中川氏によると、堤下のため池の水門は開ける機会が無くなった結果、泥が堆積し現在動かすことができなくなってしまった上、水門へ掛けられている木製の橋も腐ってしまい、渡れない状況にあるのだという。



写真 24 堤下 ため池水門

加えて泉丁のため池を筆者が 2020 年 10 月に確認したところ、泥や土に埋まったような状態にあり水が干上がっていた。水源となるため池や水門といった周辺設備自体もせき板利用の衰退によって放置状態となっており、また不備が生じているようである。



写真 25 2020 年 10 月に撮影した泉丁ため池の様子

署の伊丹氏によると、平成 18 年 1 月 1 日の与板町の長岡市合併以前は、せき板と各堤やため池、そして水門の鍵の管理は、全て与板支所が行っていたのだという。合併後、せき板の管理は消防署に渡った。しかし消防署はせき板の実用性や維持費についての懸念から、ある時期から管理から手を引く判断を下し、現在の放置状態と化したのだという。水門の鍵の管理に関しては、合併後はその堤や池のある各町内会に管理を委託するという形になったが、町内会ごとに農家組合長や区長、消防団員など担当者が異なった結果、それぞれ鍵の所在が不透明な現状となったという。実際、2.3.1 せき板の使用手順で先述した堤下のため池の水門を開けるためのハンドル（二つ存在する）は、一つは長岡市消防団与板方面隊第 2 分団第 2 部消防自動車車庫内に置かれ、もう一つは中川周治氏が所持していた。



写真 26 堤下ため池の水門用ハンドル

与板町の長岡市合併に伴い、堤やため池が消防水利として認められなくなり、与板内に防火水槽等消防設備が急速に整備された結果、せき板の管理放棄、水門の鍵の所在不明、堤やため池、また周辺設備の放置・使用不可といった問題が発生し、せき板は放置状態となったようだ。

2.4.5. せき板の今後について

伊丹氏によると、与板消防署はせき板の管理からは既に手を引いており、もし今後せき板が破損したなどの報告があれば撤去していく方針なのだという。新たに予算を投じて修理を行うという事は考えられないそうだ。その理由としては、再度せき板が使用可能な状態にするためには、せき板自体のみならず、各水門や水路などあらゆる周辺設備の点検・改修・管理を行わなくてはならないためだ。また、使用頻度が少ない事や、取水可能な水量が不安定かつ不明瞭である事などが挙げられた。上手に使用すれば有効活用可能だろうが、その労力面や維持管理費面を踏まえると、やはり防火水槽や消火栓といった現代の設備の増設や整備に予算を充てたい、とのことだった。

2.5. せき板についての概要まとめ

与板のせき板は、堤やため池が多く千体川や旧黒川といった河川が流れているという与板の自然地形を活かし、消火活動時に水利を確保するための消防設備であった。昭和 40 年以降に当時の地元消防団の依頼によって地域の金属加工屋などで次々製作され、まだ与板に消防設備が普及する以前から、大火時などに使用されてきた。与板町の長岡市合併時に併せてせき板や水門等各設備の管轄が与板支所からそれぞれ別団体に分かれたこと、堤やため池を消防水利として認めないという長岡市からの通達があったこと、その代わりとして与板に防火水槽や消火栓といった現代の消防設備が急速に整備されたことでせき板が使用されることは殆ど無くなり、放置された状態となっていることが分かった。与板消防署によると維持管理の理由から、今後せき板が破損したなどの報告があれば撤去していく方針であり、いずれ与板のせき板は街から姿を消してしまうということが予想される。

聞き込み調査の結果と「与板町 40 年のあゆみ―町村合併 40 周年記念誌―」を基に与板のせき板に関連する出来事を年表に纏めた。(表 1)

表 1 与板のせき板・消防に関連する出来事をまとめた年表

年代	できごと
昭和 30 年 (1955) 3.31	与板町・黒川村・大津村（槇原・山沢）の合併・開町式が行われた
昭和 39 年 (1964) 4.1	与板町消防団機関員常備部を中町に設置
昭和 40 年頃	与板の西側の堤やため池を自然水利として有効に用いるための水路が整備される
昭和 42 年 (1967) 7.15	与板小学校プール（現与板幼稚園プール）完成
昭和 43 年 (1968) 10.15	舟戸町に火災発生（住宅全焼 7 戸、半焼 2 戸、非住宅全焼 3 戸）
昭和 49 年 (1974) 6.26	与板小学校旧校舎（馬場丁）火災発生
昭和 50~60 年頃	消防団？署？からの依頼によって石丸熊吉商店でせき板が製作・設置される
昭和 51 年 (1976) 4.1	与板郷消防事務組合発足
昭和 52 年 (1977) 11.29	与板郷消防署新庁舎（現庁舎）竣工
昭和 63 年 (1988) 3 月	与板中学校 プール完成
平成 15 年 (2003)	与板乙 971 で火災発生 堤下のため池の水を水路に流しせき板を用い消火活動を行った最後の事例か
平成 16 年 (2004) 7.13	新潟福島豪雨 その後千体川の護岸工事に伴い、木製せき板を作り替えた
平成 18 年 (2006) 1.1	与板町の長岡市合併 堤下のため池の水が水利として認められなくなる せき板・水門の鍵など各設備の管轄変更

せき板が製作・使用されていた期間

3. 与板の人々のせき板への認識についての調査

3.1. 人々の与板のせき板に対する認識

2章では与板の消火システムとせき板の概要についての調査結果をまとめた。せき板の使用に消極的になっている状況にあり、与板の人々の中で忘れられた存在になりつつある。

1.1 研究の背景と目的にて先述した、筆者の参加している「ヨイタタンサケイカク」では様々な与板在住の方々と関わる機会があったが、その際せき板の話題が出た際も大半の方は見たことはあるものの、用途については知らないといった様子がかがえた。また消防団に所属して10年が経過している河内氏でさえも「2年前に初めてせき板について知った」とおっしゃっており、与板の街の至る所に設置され視界に入っているにもかかわらず、現状せき板は殆どの人々から意識されてない、また用途を知られていないようである。

3.2. 人々の与板のせき板に対する認識についての調査

3.2.1. 調査内容

街頭にてアンケート調査を行った。調査内容は以下の通りである。

調査日時：2020年10月3日（土）13時50分~17時20分

調査対象：与板地域の街頭の人々

アンケート内容：

①年齢・性別

②住んでいる地域とその在住期間

③以下の画像2枚を提示し、「この写真のものを知っていますか？」と質問する



④「何に使用するものか知っていますか？」と質問する。

3.2.2. 調査結果の分析と考察

表 2 与板のせき板への認識についての街頭調査結果

年齢性別	住所	在住年	写真のものを聞いたことがありますか？	横に溝のものを聞いたことがありますか？	用途
36歳 男性	与板 宮本	—	ある	溝の横の溝を指すやつです	2名のそばにもある。聞いたことないです。
36歳 男性	与板 赤江新町	20年	ない	溝の横に溝があるやつです	
36歳 女性	与板 北沢町	—	ない	溝の横に溝があるやつです	
42歳 女性	与板 赤江	—	ある	溝の横の溝を指すやつです	溝の横に溝があるやつです
42歳 女性	与板 赤江	—	ない	溝の横に溝があるやつです	
36歳 女性	与板 赤江	—	ない	溝の横に溝があるやつです	
32歳 男性	与板 赤江新町(中町)	23年	ある	溝の横に溝があるやつです	溝の横に溝があるやつです
36歳 女性	与板 赤江	23年	ある	溝の横に溝があるやつです	溝の横に溝があるやつです
36歳 女性	与板 赤江	23年	ある	溝の横に溝があるやつです	溝の横に溝があるやつです
72歳 男性	与板 赤江	72年	ある	溝の横に溝があるやつです	溝の横に溝があるやつです
60歳 女性	与板 赤江	40年	ある	溝の横に溝があるやつです	溝の横に溝があるやつです
34歳 女性	与板 赤江	7年	ある	溝の横に溝があるやつです	溝の横に溝があるやつです
4歳 男性	与板 赤江	4年	ある	溝の横に溝があるやつです	溝の横に溝があるやつです
30歳 男性	与板 赤江	30年	ある	溝の横に溝があるやつです	溝の横に溝があるやつです
70歳 女性	与板 赤江新町(東海町)	40年	ない	溝の横に溝があるやつです	
70歳 女性	与板 赤江新町(東海町)	40年	ない	溝の横に溝があるやつです	
38歳 男性	与板 赤江	38年	ある	溝の横に溝があるやつです	溝の横に溝があるやつです
18歳 女性	与板 赤江	—	ない	溝の横に溝があるやつです	
40歳 男性	与板 赤江新町(北沢町)	—	ない	溝の横に溝があるやつです	
18歳 女性	与板 赤江新町(東海町)	—	ある	溝の横に溝があるやつです	

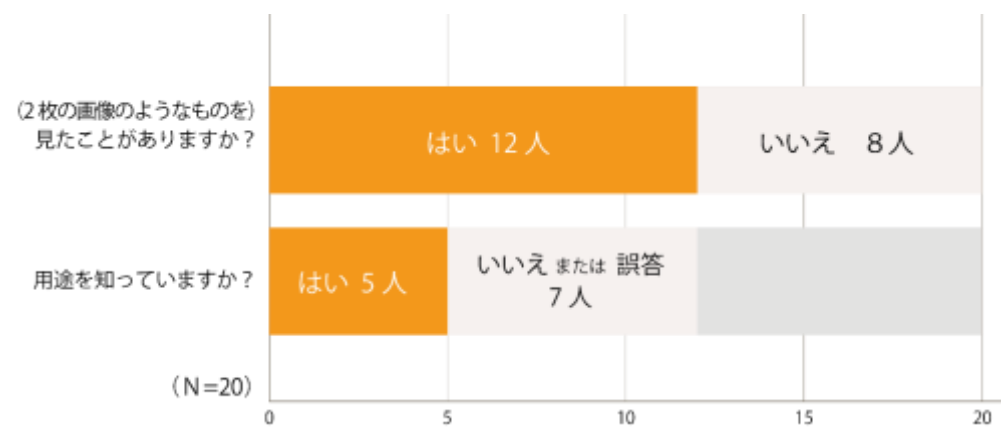


図 13 与板のせき板への認識についての街頭調査

下は 6 歳、上は 90 歳の男女合計 20 名の方に回答していただくことができた。そのうち与板在住の方は 18 名であった。

与板のせき板の写真を見て、「見たことがある」と回答したのは 12 名、そのうち用途についても正解を知っていたのは 5 名であった。

与板のせき板についてその存在と用途両方を知っているという方はアンケート回答者全体の 10%という結果である。与板地域の人々の間での認知度の低さが窺える結果となった。与板在住歴や年齢が高い方ほど知っているといったことはなく、90 歳の与板在住歴 90 年の方でも見覚えがないとおっしゃっている一方で、6 歳のお子さんは幼稚園への通園中に見たことがあり知っている、与板に住み始めて 23 年の 55 歳女性は、2、3 年前にせき板に疑問を抱き近所の方に尋ねた際に知ったとおっしゃっており、年齢や在住歴はあまり関係が見られなかった。用途についての質問の誤答（分からない・無回答を除いた全 6 件）は、全て消防関連のものという回答であった。その中でも消火栓関連・消火栓の位置を示すものだという誤答が 4 件と比較的多く見られた。

今回アンケートを回答してくださった方の中には、「側溝が改修された 2、30 年前に造ら

れたものだ」という情報を提供してくださった方や、「与板には鍛冶屋が多くて大火が発生した歴史があるんですかね」と見解を述べた方などがいた。

4. 与板のせき板の今後の展開可能性を考察するための アクションリサーチ

4.1. 街歩きワークショップによるアクションリサーチの概要と目的

この章では筆者が制作した小中学生向け小冊子「きえるかんばんマップBOOK」と、2020年11月28日に開催した街歩きワークショップ「消看板の謎を解こう」の概要と、それらを基に得られたデータの分析と考察について述べる。

2.4 せき板についての概要まとめで先述したように、与板のせき板は消防設備の未発達だった時代に与板の自然地形を活かし造られた消火システムで、現在維持管理が行われておらず、また3章で述べたように、与板在住の人々からの認知度も低下しており、今後街から姿が消えうる状況にある。与板のせき板には、与板地域ならではの製作背景があるほか、他の地域のせき板に見られない「消」という文字を円で囲んだ白いインクによる印字や専用の支柱などに掛けられ、看板のような姿をしているという独自のデザイン性がある。筆者はこれらを文化的価値と捉え、与板のせき板の研究の枠組みの中で調査・記録に加え、それら調査結果を外部に発信する活動を実際に行うことで、与板のせき板の存在とその価値を周知させたいと考えた。そのため本研究の目的は、与板の消火システムについての調査を通して「与板の消火活動用せき板」についての記録を行うことだけでなく、人々のせき板に対する認識の調査をアクションリサーチの手法を取り入れつつ行い、「与板の消火活動用せき板」の今後の展開可能性について考察を行うこととしている。

今回は実際に与板在住の人々を対象として、実証的に与板のせき板の発信方法を探る。アクションの内容としては、筆者が与板のせき板や消防設備について学ぶことのできる小冊子を制作、それを基に長岡市消防団与板方面隊員である吉村芳秀氏を解説ガイドとしてお招きし、街歩きイベントを行うというものである。

ワークショップを通して参加者たちの反応や学習内容、またワークショップ前後でのせき板への興味や認識の変化を主にアンケート形式にて調査を行う。さらには、筆者・消防団員の吉村氏・参加者間で生まれる対話やリアクションについても調査の対象とする。

メインターゲットとなる層は与板在住の小中学生とした。理由は大きく二つある。一つはせき板による防火教育、また地域学習といった教材としての活用効果を検証するためである。看板状の特徴的な見た目をしており、かつこれまで不思議な存在であったせき板がキャッチーな導入部となり、その用途を学ぶ中で、消火活動についてや防火水槽・消火栓といったその他現代の消防設備について知る・興味を抱く、また防火意識を持つ契機となるのではないだろうか。またそれが自分たちの住む与板地域に根ざしたものということで、それらをより一層“自分ごと”として捉えることができるという効果があるのではないだろうかという仮説を私は立てた。また、防火教育だけでなく地域学習の側面においても、街のあちこちに点在するせき板を歩いて探す中で、河川や水路、そして地域全体について再認識しより街に愛着を持つことに繋がるのではないだろうか。

小学生をターゲットとした理由の二つ目としては、保護者世代の方にも参加していただけることを狙ったためである。単に街歩きにおける子供たちの安全注意、そして親子間のコミュニケーションによる学習補助効果のみならず、保護者自身（与板に住む若い世代の方々）

にもせき板や消防全般について、加えて地域について再認識していただこうと筆者は考えた。

4.2. 『きえるかんばんマップBOOK』の制作

4.2.1. めざす目標

街歩きワークショップにて配布する小冊子を制作した。制作にあたり設定した目標が二つある。まず一つは、対象である小学生に与板のせき板と消防について興味を持ってもらうために表現の工夫を施すことである。難しい表現を避ける、振り仮名を付けるなどの処理はもちろんのこと、内容や解説を分かり易く伝えるための表現方法に気を付けるべきだ。子供たちが理解しやすい表現というのは、即ちそれより上の世代の方々などにとっても理解しやすいものであり、せき板の周知に際して非常に有効だと言えるのではないだろうか。また、小中学生にただ内容を受動的に理解してもらうだけでなく、好奇心をくすぐられるような、楽しみつつ自発的にせき板や消防について学べるような仕掛けを盛り込むことを目指した。

二つ目に、教育的な内容にすることである。「わたしたちの与板町」¹³という与板町教育委員会が発行した、小学校3・4年生向けの社会科学習資料集の第8章「火災をふせぐ」では、与板町の消防全般についてが取り上げられているが、せき板に関する記述は一切見当たらない。一方でせき板が与板の消火活動で使用されてきたことは事実であり、本来ならば掲載されて然るべきではないだろうか。

¹³ 参照したのは平成15年3月14日改訂版発行のもの（昭和62年初版発行）

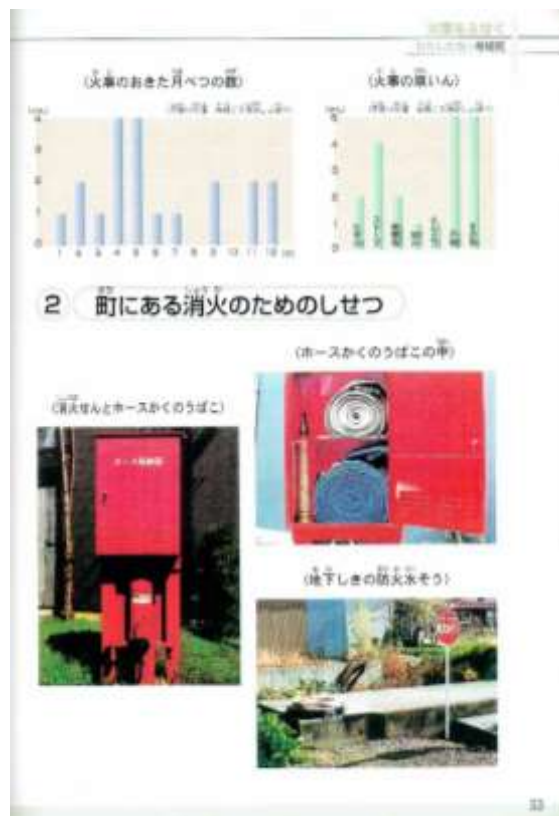


写真 27 「わたしたちの与板町」 p52-54

そこで筆者は与板のせき板の特徴的な見た目を活かした、「街で見かける不思議な看板（せき板）について知る」ことから始まる、自分の住む地域の消防についてや街についての再認識、また最後には防火への意識を高めてもらうといったアプローチの総合学習的な内容の小冊子を目指すことにした。

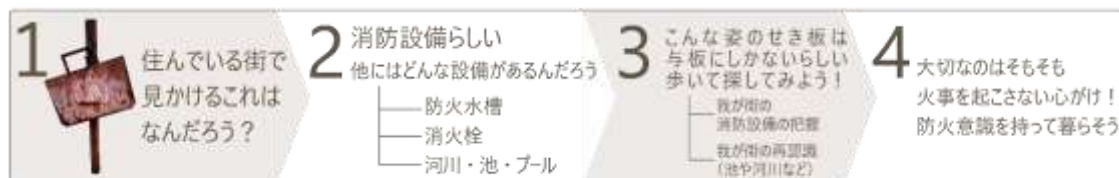


図14 せき板による地域総合学習のアプローチの仮説

4.2.2. 完成した内容



写真28 きえるかんばんマップBOOK 表紙・背表紙

きえるかんばん？ ってなに？




よいたには、こんなかんばんのようなものが
まちのあちこちにおかれているんだ！
いったい、なにに使うものなんだろう？

あつ！ぼくもこれみたことあるよ

「消」って、いったいなにを
あらわしているんだろう…？

おぼえてみよう 漢字のコーナー

消	消	消	消	消	消	消	消	消	消
---	---	---	---	---	---	---	---	---	---

例：火が消える。消ぼう具。

なにに使うものなの？

じつは、火事が起きたときに使うものなんです！

あつ！消火の「消」なんだね！

「きえるかんばん」の使いかた・しくみ

- 山のほうにあるため池や
プールの水をおとします。
- 水がさかを下って、まちの
排水路にながれていきます。
- きえるかんばんを外して、
みぞにはめこんでおく。
- そこに、ながれてきた
水がたまっていきます。
- 消防車のポンプでくみあげて
消火かどうに使います。

こんなしくみがよいたにはあったなんて…！

ほかにはどんな 火事を消すしくみがあるの？

このきえるかんばんを使ったしくみができたのは
いまからおよそ 50 年くらい前。(昭和 40 年ごろ)

いまではこれらのあたらしい消防せつび
(火事を消すしくみ) が活やくしているよ！

ぼうかすいそう

長いパイプがめじるし。
ちかちかに 40 トンいじょうの
水がはいるすいそうがう
まわっているよ。

しょうかせん

ホースをつないで使うよ。
みんなの家の上水道かんど
ちよくせつつながっている
んだ。

そのほかにはがっこうのプールの
家や、川や池の水も使われるよ。

まちのなかを見まわしてみると
あちこちにあるね！

ぼくの家からいちばん近い
消防せつびはどこだろう？

「きえるかんばん」は よいただけ…？

じゃあもうきえるかんばんは
使われていないのかな？

そうなんです。だけれど、いまでもよいたには
30 まい近く そのままのこっています。

ちなみにこうしたきえるかんばんが見られるのは、
よいた地いさだけなんです！

えっ！？そうなの！？

とちお地いさなどのほかのまちにも、にたような
いたはあるけれど、よいたのように文字が
かかれていて、かんばんのようなすがたのものは
見つからないんです。

よいたにしかないきえるかんばん
もって見つけた〜い！

きえるかんばんさがしに
しゅっぱーだー！

写真 29 きえるかんばんマップ BOOK p1-4

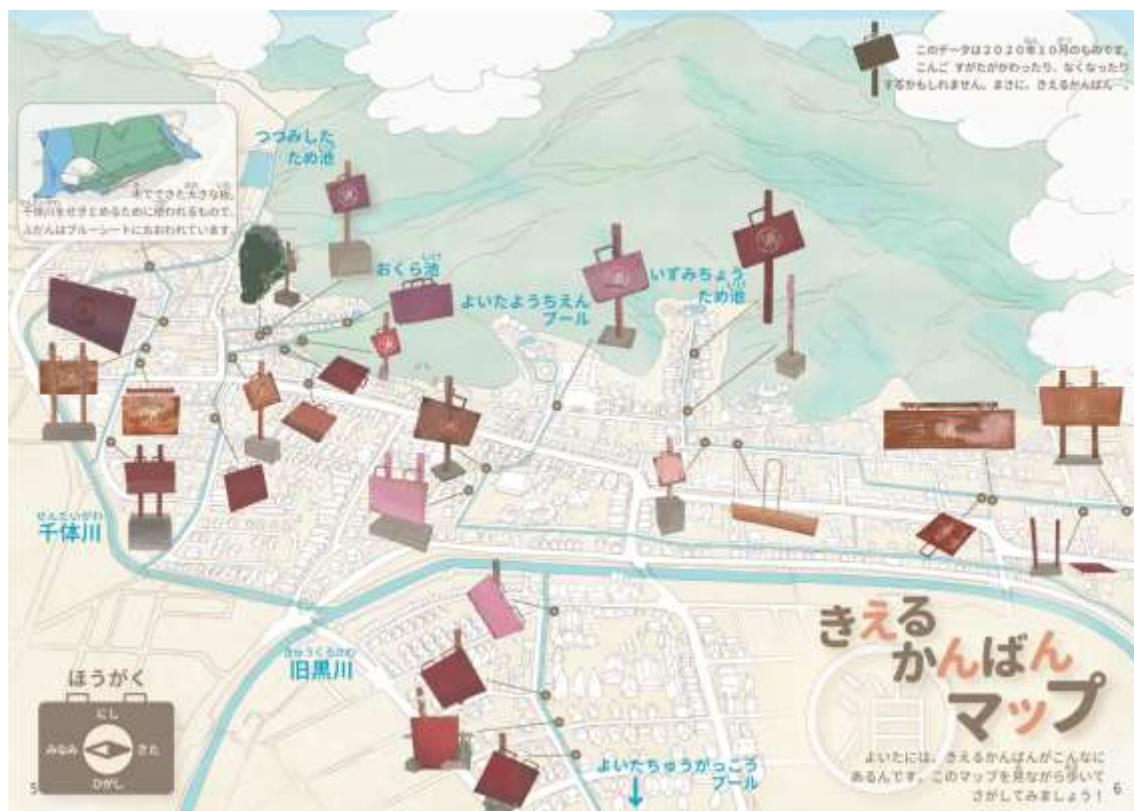


写真 30 きえるかんばんマップ BOOK p5-8



写真 31 きえるかんばんマップ BOOK p9-10

小冊子のタイトルは「きえるかんばんマップ BOOK」とした。「きえるかんばん」とは、与板の消火活動用せき板のことを指している。与板のせき板はただの鉄板ではなく、「消」の文字とそれを囲う円が白いインクで印されている点、それが住宅の壁などに立て掛けられるのではなく、専用の支柱に掛けられて設置されている点に他地域に見られるせき板とは異なる特徴が見られる。メインターゲットが小中学生である事と、親しみを持ってもらいたいという意図から、今回のアクションリサーチではこうしたネーミング（消看板—きえるかんばん）での発信を行うこととした。そもそも本稿での「消火活動用せき板」という表記自体も正式名称ではなく、「せき板」「落とし板」「止水板」など人や地域によって呼称は異なっている。

内容としては、4.2.1.章の図 a にて示したせき板による地域総合学習のアプローチに基づいて構成を行った。全編に渡り地の文に加え、男の子と女の子のキャラクターがメインターゲットである小中学生の読者と同じ立場からコメントするといった形式を取ることで読みやすくなるという効果を狙った。

1 頁にてまずせき板の実物の写真を提示し読者に問いかける。下部には消という漢字を学び書き込むコーナーを設けることで積極的な学習を喚起させた。2 頁ではせき板が消火活動にて用いられることを明かし、イラストを用いてその手順を解説する。3 頁では現在主に用いられている消防設備についての紹介を行う。「ぼくの家から一番近い消防せつびはどこ

だろう？」という男の子の台詞によって、読者に近隣の消防設備の確認を呼びかける。4 頁では与板のせき板の独自性を示し、5-6 頁の見開きにてせき板の設置箇所と、ため池やプール・河川や用水路といった水源、水の流れていくルートを視覚化したマップを掲載する。せき板の姿は写真ではなくイラストにて表示した。マップを見ながら実際に与板を歩き、実物を探し確かめてもらいたいという狙いがある。7 頁では「消看板図鑑」と題し、様々な姿のせき板を分類別に紹介、また“レア度”を設定し好奇心をかき立てる仕掛けを作った。8 頁ではここまででせき板や消防設備について興味を持ってもらった上で、防火を呼びかけている。9 頁では街歩きの際の安全に関する注意と筆者のコメントを掲載している。10 頁は見開きの調整用で、メモ欄となっている。

4.3. 街歩きワークショップの開催

4.3.1. 当日まで

2020 年 11 月 29 日(日)の 10 時～12 時に街歩きワークショップ「消看板の謎を解こう」を開催することにした。与板在住の小中学生とその保護者の方に参加していただくため、事前にこのようなパンフレットを制作した。(図 19)



図 15 制作したパンフレット

4.3.2. ワークショップ当日の流れ

当日は与板在住の子供たち 11 人とその保護者 7 人（7 世帯の方々）に参加いただいた。

10:00 ワークショップ開始 @愛宕神社

挨拶と、このワークショップのテーマを説明する。ただしせき板を「消看板」と呼称し、まだそれが何に使用されるものなのかは明かさない。

せき板の写真を提示し、「この写真のものを見たことがありますか？」と質問すると、ほぼ全員の参加者から「見たことがある」という回答を得た。子供たちからは「あの場所にあったよね」などお互い話し合っている様子が見られた。



写真 32 街歩きワークショップの様子（イントロダクション）

10:05～ 街の中の「消看板」を探し歩く

与板の街の中にある「消看板」を探し歩き、実物や周辺環境をよく観察して「消看板」の用途を推理してもらった。子供たちは遠くにあるせき板を発見次第「あった！」と反応しかけ寄るなど、「消看板」探しを楽しんでいる様子であった。保護者の方々も一緒になってせき板を観察し議論していた。



写真 33 街歩きワークショップの様子（街の中の「消看板」を探し歩く）

10:15 質問・意見交換

ここまで観察して分かったことを頼りに、子供たちに「消看板」の用途について予想し発表してもらった。「近くに消火栓があるのを表している」「ここで火事が起こると危険という意味の看板」「動物に赤い木の実を食べられないようにするため」「昔の大切なものや宝物」といった様々な意見が出た。「消」の文字から消防を連想できた子や、近くにあった植物の果実に目を付けた子など、実に多様な視点から想像を膨らませたようである。



写真 34 街歩きワークショップの様子（質問・意見交換）

10:30 種明かし せき板についての解説

ここで、「きえるかんばんマップ BOOK」を配布し「消看板」の種明かしを行った。種明かしを聞きながら子供たちはマップ BOOK を熟読し、理解している様子であった。

次に吉村氏からは消防団員としての解説に加え、実際に側溝にせき板を差し込むという実演も行った。せき板が溝に上手く嵌ると、子供たちに加え保護者の方々からも感嘆の声が上がった。



写真 35 街歩きワークショップの様子（小冊子配布）



写真 36 街歩きワークショップの様子（せき板を差し込む実演）

10:40 せき板の使用手順を学ぶ@堤下ため池～千体川

堤下のため池から千体川の流れて歩いていき、2.3.1 せき板の使用手順 にて先述したように、①ため池の水門を開き水を流す→②下流の木製せき板でせき止める→③街中のせき板で水を確保するというせき板使用までの手順を説明した。また、道中では消火栓や防火水槽など現代の消防設備についても吉村氏からの解説があり、与板の消火システムについて参加者たちは体感的に学んでいった。



写真 37 街歩きワークショップの様子（堤下ため池～千体川）

11:10 消火栓の使用方法レクチャー

せき板・自然水利に関する解説を終え、最後に消火栓の使い方についてのレクチャーを行った。消火栓の取水口にホースを繋ぎ、初期消火までの流れを吉村氏が説明するというもので、子供たちは普段は見られないホース格納庫の中を観察したり、ホースを実際に構えてみたりするといった体験を行った。



写真 38 街歩きワークショップの様子（消火栓の使用方法レクチャー）

11:40 事後アンケート

全てのプログラムを終え、子供たちと、その保護者の方々全員に対してアンケート調査を行った。回答方法はワークシートへの自由記述で、設問は以下の二つである。

- ①配布した「きえるかんばんマップBOOK」と、
街歩きワークショップの感想を自由にご書いてください
。
- ②今後「消看板」がどうなっていってほしいですか。
あなたの意見やアイデアをお聞かせください。



図 16 街歩きワークショップで歩いた順路

4.3.3. フィードバック

①の回答として、子供たちからは「消看板の謎が解けてよかった。」「いざという時の使い方が分かった。」「消看板にはこんなにも工夫があって、すごいと思った。」といった感想が寄せられた。保護者の方々からも「この地に住んで2年となりますが、消看板を初めて知りましたし、地域の消火活動に必要な事を知りました。ため池からのシステム等大人でも非常に学ぶことの多い一日でした。」といった感想を得ることができた。せき板の用途を知らせるという、ワークショップの最初の大きな目的は達成できたことが分かる。

さらには、子供たちの感想の中には「消火器（正しくは消火栓）の体験ができてうれしかった。」というものや、消火栓について学んだことの記録や様々なイラストが描かれているものもあり、せき板と紐付けて地域の消火設備についても関心を持って学んでもらうことができたのではないだろうか。

また「もっと消看板を探したい。」「また子供たちとの散歩でよく見ながら歩きたい。」といった感想が子供たちと保護者の方々双方から寄せられ、次のアクションや街歩きを促すことができたと推測できる。

②の回答では、子供たちからは「今まで通り使われてほしい。」「使っていないから使ってほしい。」といった、今後も消火活動時に使用されてほしいという意見や、「今後みんなに知ってもらふ訓練があるといい。」「使い方のポスターを貼って、使い方がみんな分かるといい。」といった、用途を報知するためのアイデアが寄せられた。また、「他の事にも役立てられるようにしたり、資源として使ったりしてほしい。」「消火栓や火事が起きた時の目印として置いてほしい。」「これからは町のシンボルになってほしい。」といった異なる用途への転

用の斬新なアイデアも寄せられた。

保護者の方々からは「役割がもう少し住んでいる人に伝わると良いと思います。訓練の日にも少し説明があると良いかな。」といった意見や「消火に必要なものであり、歴史的な財産でもあると思います。残しておくべきものだと思います。」「今後も消火活動の象徴として継続してもらいたい。」といった地域資源としての保存を求める意見も寄せられた。

4.4. アクションリサーチ全体の分析と考察

与板のせき板の存在とその価値を周知させるための手段として、今回筆者は小中学生向け小冊子「きえるかんばんマップBOOK」の制作と街歩きワークショップを開催し、参加者たちの反応や学習内容、またワークショップ前後でのせき板への興味や認識の変化を調査した。

●マップ・街歩きという手法について

今回のワークショップ参加者は全員が与板在住であり、制作し配布した小冊子（街歩きマップ）と実施した街歩きは自身の現在暮らしている与板地域が舞台のものであった。街歩き用マップや街歩きワークショップは、複雑かつ大量の要素や情報で溢れる「街」というハードに対して、制作者が何らかのテーマを設定し意図的に情報をピックアップすることで伝えるという手法であると筆者は捉えている。参加者は自身の今暮らしている街のそうしたマップやワークショップを通して、見慣れた風景を新たな視点で、無意識に暮らす日常を改めて意識的に、【眺める・感じる・歩く】といった「我が街の再認識」を行うのである。

これまで街の中で目にはしていたが意識せず、無視していたせき板にフォーカスを当て、その謎を紐解くという今回のテーマはまさに「我が街の再認識」であった。また、日常的な防火意識を高める・自身の生活範囲にある消防設備の位置確認や用途・システムの把握を行うといった防火教育（防災教育）も「我が街の再認識」に該当するだろう。概念的に防火や防災を学ぶのではなく、実際に家の周りや住んでいる地域というフィールドを意識しながら考え学ぶことができたという点で、せき板と防火教育と結びつけたマップ・街歩きワークショップという今回の手法は効果的であったと言えるのではないだろうか。

せき板による防火教育とは別に、地域学習のための教材としての活用効果についても検討を行い、制作した小冊子では河川やため池についての言及と、マップでの各自然水利や水路の表現で、街歩きワークショップではため池から千体川の下流の木製せき板までを歩いて辿るというプログラムなどを行い、自然地形について学んでもらおうと試みた。しかしため池の水門の故障により実際に水路に水を流すことができないことから、なかなかイメージが掴みづらく教育効果としては薄かったかもしれないと筆者は感じている。川の水量が多い時期に実際にせき板を使って水を確保する実演を行う、または与板地域のミニチュア模型を制作し、水を流し説明するなどより効果的なその他の手法を検討する必要があるだろう。

今回のアクションリサーチでは与板在住の子供たちや若い方々を対象とした、防火教育や地域学習の教材としてのせき板の活用方法についてはスタディできたが、与板外部の人々に向けた与板のせき板の周知と活用方法に関しては、また異なった内容でのアプローチの検討が必要である。

●与板のせき板の意匠性

与板のせき板はただの鉄板ではなく、「消」の文字とそれを囲う円が白いインクで印されている点、それが住宅の壁などに立て掛けられるのではなく、専用の支柱に掛けられて設置されている点が特徴的である。今回制作した小冊子と開催した街歩きワークショップでは、せき板のそうした独特なデザインを踏まえ、メインターゲットが小中学生である事と、親しみを持ってもらいたいという意図から「消看板」というネーミングにて発信を行った。事後アンケートでは参加者はみな「消看板」と記述しており、定着させることができたようである。また、ワークショップの冒頭にて筆者が参加者にせき板の写真を提示し、「この写真のものを見たことがありますか？」と質問をした際に、子供たちは「〇〇で見たよ」「〇〇のところにもある」などと次々話し合っている様子が見受けられた。与板のせき板の独自のデザインは、普段の生活の中で度々目に付き、印象に残りやすいのではないだろうか。実際、子供たちの事後アンケートの中にはせき板の姿がイラストで描かれているものが見受けられたほか、今回の街歩きワークショップには消防団員である河内氏のお子さんも参加して下さったのだが、ワークショップ終了後にアイロンビーズを用いてせき板を模した作品等を制作してくれた。これらを踏まえると、子供たちが特徴的なビジュアルを持つ与板のせき板（消看板）に対し、愛着を持ってくれるという可能性は十分にあると言えるのではないだろうか。



写真 39 河内氏のお子さんによる作品 1

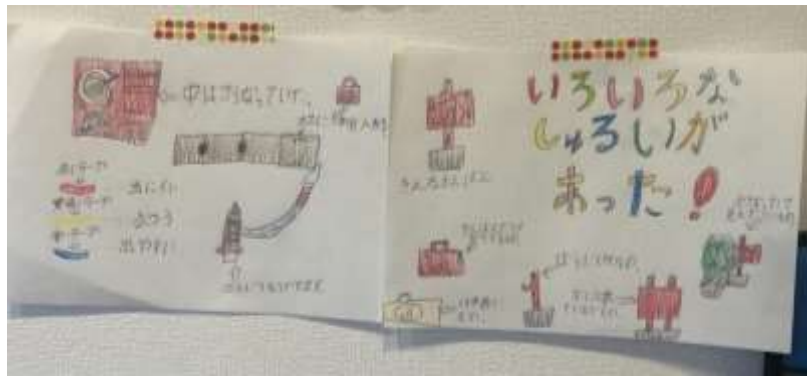


写真 40 河内氏のお子さんによる作品 2

●消防関係者（消防団）と一般市民の間の溝

本研究では主に消防関係者への聞き込み調査を基に消火活動用せき板についての情報収集を行い、加えて消火活動におけるせき板のポジションを把握するために、防火水槽や消火栓といった全国的に普及している現代の消防設備についてもお聞きし、その調査結果を基に、小冊子の消防設備についての頁や街歩きワークショップでの解説にて与板在住の方々への報知を行った。

筆者を含め基本的に消防に携わることのない一般住民にとっては、各消防設備の仕組みや使用手順・消火活動の流れといったものを知る機会はどう多くはない上、意識を向けることもほとんどないだろう。3章で述べた街頭でのアンケート調査や、今回の街歩きワークショップを通して、消防関係者と一般市民の間には、消火活動の基本知識量や認識に大きな溝があるように感じた。一方で火災は日常生活の中で起こりうる身近な危険であり、発生した際には素早い初期消火が重要とされるほか、普段からの火災への意識付けや予防対策が求められる。

また関連する問題として、全国の消防団員数の減少・消防団員の平均年齢の上昇が挙げられる。消防団とは、常勤の消防職員により構成される消防署と異なり、火災や災害・訓練時に自宅や職場から現場へ出動し活動を行う非常勤特別職の地方公務員である。そうした全国の消防団員数は年々減少しており、昭和 40 年に 1,330,995 人だった団員数は平成 30 年には 843,667 人となっている。また消防団員の平均年齢についても上昇傾向にある。平成 30 年の段階で 41.2 歳となっており、¹⁴若い人材の確保が求められている。長岡市消防団与板方面隊の吉村氏は、街歩きワークショップ終了後に「子供たちがこれを機会に消防の仕組みに関心を持ってくれたら良いと思います。10 年後 15 年後に消防団に入って貰えたら嬉しい。」とコメントしていた。せき板を与板地域の消防のアイコン的な存在として活用する

¹⁴ 総務省消防庁編:消防団の現状 | 平成 30 年度版消防白書,2018.

<https://www.fdma.go.jp/publication/hakusho/h30/topics5/38237.html>,(参照 2021-02-01)

ことで、与板の人々の防火意識の向上や、消防団という地域コミュニティの活性化に繋げることは可能ではないだろうか。

4.5. 今後の展開可能性

今回制作した「きえるかんばんマップ BOOK」は、筆者が参加しているプロジェクト「ヨイタタンサケイカク」にて実際に与板の観光案内所や飲食店などで配布する予定である。より多くの人々に小冊子を手に取っていただき、与板の消防設備や防火について考えていただく、さらにはせき板に興味をもっていただけることに期待したい。

筆者は 1.2 研究の目的にて先述したとおり、本研究を通して与板のせき板の普及活動を行い、かつ論文を発表することで与板の人々の記憶と記録を残したい、願わくば与板のせき板の地域性と文化的価値が見直され、保存活動が行われる端緒となれればと考えている。街歩きワークショップ後のアンケートにおいても「今後“消看板”がどうなっていったほしいか」という質問に対し、与板在住の子供たちと保護者の双方から地域資源としての保存や新たな用途への流用などの意見やアイデアが寄せられたことから、与板のせき板の今後の展開について検討する必要があるだろう。今回のアクションリサーチは与板在住の人々（子供たちや若い方々）を対象としたものであったが、与板のせき板の保存・活用への展開を見据えると、今後は与板在住でない・与板に訪れたことのないような人々への発信も視野に入れるべきである。

その一つの方向性として、トマソンの存在としての外部への発信が考えられる。『新潟県長岡市の与板地域には消火活動に用いる「せき板」が街の至る箇所に設置されている。この地域のせき板は鉄板に「消」と印字された看板状のユニークな姿をしており、それらは時を経てほとんど無用の長物と化しているにもかかわらず、そのまま街の中に放置され遺された状態となっている。』といった状況やその存在を外部に発信するのである。1972 年に赤瀬川原平が純粹階段を発見しトマソンと命名し、1986 年に赤瀬川原平、藤森照信、南伸坊らによる「路上観察学入門」が出版されて以降、路上観察の概念は瞬く間に世間に知れ渡った。現代においても Twitter などの SNS には様々なユーザーによって「#路上観察」といったハッシュタグなどを用いた物件や路上の事物の画像の投稿が連日行われているほか、全国各地の街の中にある不思議な光景や物を紹介するバラエティ番組「ナニコレ珍百景」が人気を博しているなど、人々の路上への興味関心は飽くなきものとなっている。与板のせき板をそうした地域の不思議として発信することで、一定の人々に対して与板に訪れる・興味を持ってもらえるきっかけとなるのではないだろうかと筆者は考える。その手法としてせき板を歩いて探す街歩きやマップ、あるいは意匠の面白さや形状・大きさのバリエーションを活かしたグッズの展開などが想定されるだろう。



写真 41 せき板を模したグッズ展開のイメージ

また、現状どの団体にも管理されていないという状況にある与板のせき板を、今後も遺していく・保存するための活動として、文化的価値の発信は不可欠である。与板のせき板は昭和40年頃に生まれた民具で、旧与板町の人々の暮らしにおける消火のために地域の金物店で製作され、度々用いられてきた。旧与板町には古くから鍛冶屋が多く並び、度々大火に見舞われたこともこうした消防設備の誕生に少なからず影響を与えているだろう。洪水と水不足の備えとして古くに与板地域の西側に多く作られ現存するため池や堤などの自然水利を活かしたという先人の工夫や、他地域のせき板には見られない独特な意匠など、地域の歴史や特色や暮らしぶりが色濃く反映されたものであり、文化的価値は大きいのではないだろうか。いわば街の中に残る民俗資料であり、たとえば有形民俗文化財としての登録という展望も、今後の調査結果によっては十分考えられるだろう。そうした保存活動に繋げるためにも、まずは与板のせき板の普及活動や活用による人々の認知を高めるという段階が必要だと筆者は考えている。

5. まとめ

5.1. せき板の現状と認識についてのまとめ

本研究の目的は大きく二つあり、一つは与板の消火システムについての調査を通して「与板の消火活動用せき板」についての記録を行うことであった。与板の消火活動用せき板に関して記述のある資料の存在は一切確認できなかったため、筆者は長岡市消防団与板方面隊の現消防団員・長岡市与板消防署・元消防団員・せき板製造元といった各関係者へのヒアリング調査と数回のフィールドワーク、Google Earth ストリートビューでの調査、文献調査などを通して情報を収集した。2章ではそれら調査によって得られたせき板に関する情報を2.2.章では現在の設置箇所とその個数についてを地図上にプロット、2.3.章では与板の消火システムとせき板の概要についてをそれぞれ「せき板の使用手順」「消火システムについて」「せき板の設置経緯について」「せき板の現状について」「せき板の今後について」という項目別にまとめ、記録することができた。

与板のせき板は、堤やため池が多く千体川や旧黒川といった河川が流れているという与板の自然地形を活かし、消火活動時に水利を確保するための消防設備であった。昭和40年以降に当時の地元消防団の依頼によって地域の金属加工屋などで次々製作され、まだ与板に消防設備が普及する以前から、大火時などに使用されてきた。平成18年1月1日の与板町の長岡市合併時に併せ、せき板や水門等各設備の管轄が与板支所からそれぞれ別団体に分かれたこと、堤やため池を消防水利として認めないという長岡市からの通達があったこと、その代わりとして与板に防火水槽や消火栓といった現代の消防設備が急速に整備されたことでせき板が使用されることは殆ど無くなり、放置された状態となっている。与板消防署によると維持管理の理由から、今後せき板が破損したなどの報告があれば撤去していく方針であり、いずれ与板のせき板は街から姿を消してしまうということが予想される。

一方でこれらの情報は伝聞によるものであり、正確な情報については明らかになっていない。設置箇所のデータについても、数回のフィールドワークにて筆者が確認する事のできた、現存する与板町・本与板町のせき板であり、撤去されてたものや発見できなかったものが無いとは断言できない。そのほか、与板以外の他地域にて見られる消火活動用せき板との関連性や与板のせき板の特徴とも言える独自の意匠の発祥など依然不明な点は数多くあり、今後さらなる調査が必要となるだろう。

研究の目的の二つ目は、人々のせき板に対する認識の調査をアクションリサーチの手法を取り入れつつ行い、「与板の消火活動用せき板」の今後の可能性について考察を行うことであった。3章では与板にて行ったせき板への認識についての街頭アンケートから得られた調査結果の分析と考察を行った。また、4章では小学生とその保護者の方々を対象とした小冊子の制作と街歩きワークショップの開催を行い、参加者たちの反応や学習内容、またワークショップ前後でのせき板への興味や認識の変化を調査した結果をまとめ、与板のせき板を人々に発信する際のアプローチや手法について検討・考察を行った。

小学生を対象とした防火教育や地域学習といった教材としてのせき板の活用を行う際に、マップや街歩きといった手法を用いることは、我が街の再認識を誘発させることができる

ことから有用な手段であると言える。

また与板のせき板の特徴的なビジュアルは、子供たちの印象に残りやすく、今回のように「消看板」といった呼称を付けるなど、発信方法次第ではせき板自体に加え消防や与板地域などへの興味や愛着形成を助長させることができるだろう。

今回の研究ではアクションリサーチによって与板在住の人々へ向けたせき板の活用と発信のアプローチを探ったが、与板在住でない・与板に訪れたことのないような人々へ向けたものについてはまた異なる内容が望ましい。4.5 章にて提示したように、トマソンの発信方法による普及活動、さらには文化的価値を見出し発信、保存活動へと接続するといった展望などが考えられる。今後さらなるリサーチと検証、そしてせき板自体の調査が必要だろう。

5.2. 地域色と市町村合併についての考察

1999 年の合併特例法改正による平成の大合併では、全国の市町村が相次いで合併した。1999 年から 2010 年で市町村数は 3232 から 1727 に減少¹⁵し、与板町の長岡市合併もそうした動きの中で行われたものの一つである。使用されず放置状態となった与板のせき板の背景には、合併に伴う設備の管理部門の統合や引継ぎ、長岡市内におけるシステム統一の為「せき板の使用を認めない」とする行政からの通告があったことなどが本研究の調査によって明らかになった。与板のせき板は市町村合併に付随して発生した問題により失われかけている、地域の歴史や文化の一つであると言えるだろう。

合併により町の境界が取り払われた一方で、その地域に住む人々が抱く「暮らしている我が街・地域」という認識はそう簡単に変容しないものである。地域の歴史・文化・伝統を丁寧に拾い上げ、継承・保存する活動は、そこに住む人々が街や地域コミュニティに抱く愛着や帰属意識・アイデンティティの形成に繋がる。そうした活動の在り方の一つとして、本研究の「与板にのみ点在する消火活動用せき板」のような一見ニッチな物を対象とするようなケースが存在しても良いと筆者は考える。住んでいる街や暮らしの中に存在するあらゆる事物一つひとつに、その地域の歴史や文化といった文脈が当然付随している。今や当たり前となっている街や暮らしの風景を改めて見つめ直し、発見し面白がる。さらには価値を見出し発信することで、他のどの地域とも異なった独自の地域の魅力の創出や、問題解決が実現するのではないだろうか。

¹⁵ 総務省(編):地方自治制度 | 広域行政・市町村合併,2009.
<https://www.soumu.go.jp/kouiki/kouiki.html>, (参照 2021-02-01)

6. 付録

1. 街歩きワークショップにて参加者に回答していただいたワークシート（子供たち）

おなまえ ねんれい 12

さい

火事の後けんがいは関係していません。
~~消え~~



おなまえ ねんれい

さい

感想 いろいろな車か知れてよかったです。
~~消え~~ かんがえておくれ町のシンボルに
 なっています。



おなまえ _____ ねんれい _____ さい

9

1. 毎カキが木のみにてやるから
 ケン水をとめる・かじ



おなまえ _____ ねんれい _____ さい

しょうかやせんかり
 ホースカカッつよあつた
 じってみせせてくはてうれしかったて...あ!

こからアからてははてい
 つかてゆなりかうせつかってほしい

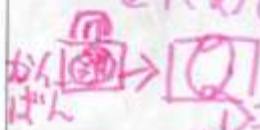



おなまえ

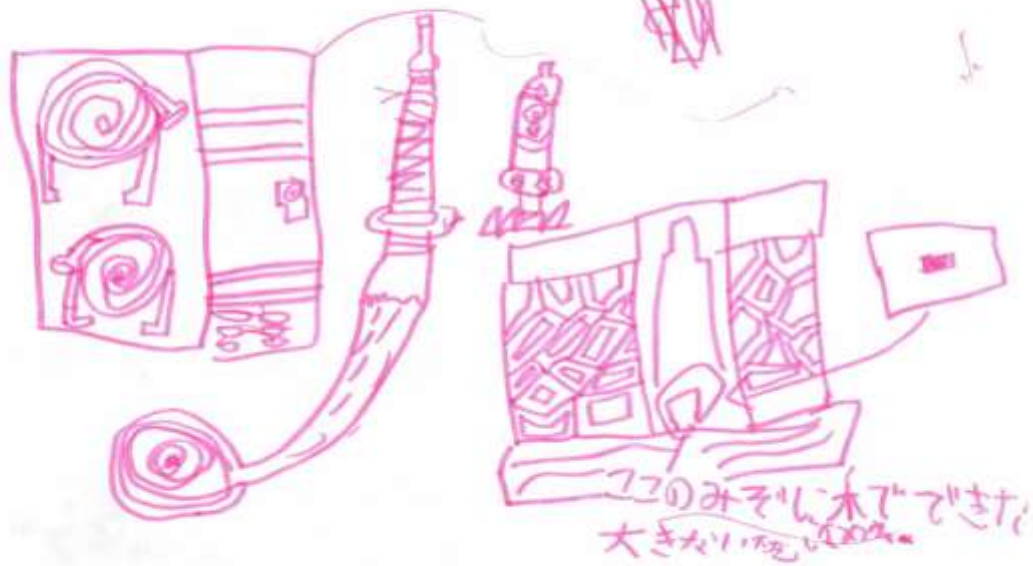
ねんれい

8 さい

のどがづに木のめを食ひらせかけた
一回かゆいおすまじきのしるし
のむか、そこのしうがきがあいてあった
答えそのかんはくをきいてたゆせにフク
せためてきれてすいどる



このみぞにかんはく



おなまえ

ねんれい

8 さい

赤いテープ

黄色のテープ

の黄色のテープは、きいろい色が
の青いテープは、あおい色が
の赤いテープは、あかいろい色

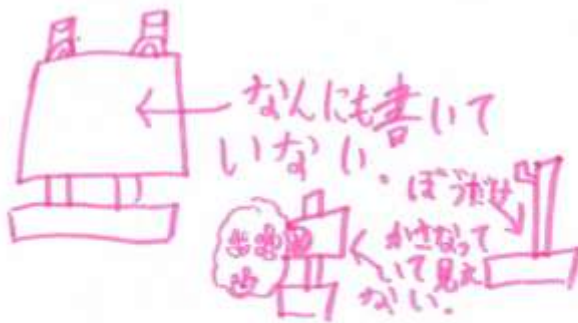
田 だ さん テープの色で出やうか出にくいかな

あるのにおどろいた。きえるかんばんは、こんなのにも
くふうが、あつてすばいかなと思った。ま、何かのねづいて

きえるかんばんは、これからしょうかせんの
近くにやじるでおいて、かじがおどろく
にやじるして、おいてほしい。



きえるのかんばんは、いろいろなしるいがある。たくさん
見つけられて、とれたのしるい。きえるかんばんマップは、
なんにも、もじが書いてないものや、おちているもの
などがたくさんあって、おもしろかった。



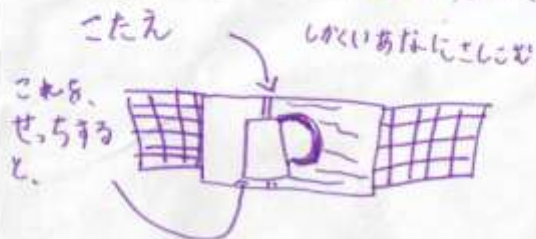
おちている
✓

おなまえ

ねんれい

7 さい

おかしのたいせつなものや、たからもの。



- いっぱい なぞがとけてよかったです。
- みんなの、いけんがすてきた。たことです。
- おとなも、たのしそうにしてたのしか、たこと。



おなまえ

ねんれい

7 さい

- こどももしゅうかきのたいけんしたのでうれしかたです。
- ~~きょうは、きょう~~

- ショウのかんはんのなぞがとけてうれしい
- いろいろなことができてうれしかたです。
- きえる、てゆうなぞがとけたのでよかったです。
- ショウ、ていいてあるかんはんがなんのためにあるかわがてうれしかたです。
- いっぱいかんはんがみつがたのでよかったです。
- また、あるかもしれないからこんどからあつちみつけたいひ
- す。• ショウのなぞがとけてうれしかたです。



おなまえ ねんれい

11 さい

ここで火事~~が~~起こるとおけんとい意味。



おなまえ ねんれい

11 さい

①かんばんマッパはすごく糸田カリマッパが
 であって良かった。

②他の事にも役だてがたうように
 たり、いげんとして使たッしてほし。



おく

ねんれい

22さい

赤い木の実は守るため?
水が~~あ~~あぶり
る
→ 消えん?



おなまえ

12ねんれい

さい

① 感想

いざという時の④かんぱんの使
った。 使い方が分か
どこにかんぱんがあるか分かった。

② どうなってほしいのか

与板しかない物だから、~~自作~~使
方のポスターを貼って、使い方がみん
な分かるように思った。



おなまえ ねんれい 12 さい

消防車が ~~あそび~~
 ここにこれはないが



おなまえ ねんれい 12 さい

消える人ばいがあつとわかつた。
 どういう役書りがよくわかつた。

今後、みんなに知ってもらふ
 訓練があるといふ。



おなまえ _____ ねんれい _____

8 ~~さい~~ さい

ちかくに「しょうせんか」あるのをあらわしてる
こたえめずおためたね
 きえるがんばんは、~~いえる~~ためきやめるさ
 かるがう そのがある
 きえるがんばんはいる、うみ
 やくに たつどうぐだ 
 わかつ、いっせいきえるがんばんがある

おなまえ _____ ねんれい _____

8 ~~さい~~ さい

おもったこと

きえるがんばんはかちさめちさでがさか
 たてとせんの「やくにたつと」
 づく「たつた」ということ
 それで「おれからもちとしらて」
 たいとおもった。
 しープのいさでるを、かきまわす
 もつとしらて「たい」で「わつた」
 まい「きえるがんばん」をさすといて おもた

わたしは みんなのいけんがき
けてうれしがたです。またおま
るかんぱんを思ひつけていいとおも



2. 街歩きワークショップにて参加者に回答していただいたワークシート（保護者の方々）

① この地に 住んで 2年とあります。 消防署も初めて知りました。地蔵町 消防活動に必要と知りました。 ためにも防災システム等、大人でも 非常に学ぶ事が多い。旧てした。 ありがとうございました。 ② 消防には必要とあり、 歴史的な財産でもあると 思います。残しておくべきだと 思います。	消えるカンパンの存在から消防に関する知識を 得ることができ、為になりました。そして消防の関係者が 普段から多くの練習や、勉強しなければならぬことが 想像され大変だと感じました。 消えるカンパンは去今後も消防活動の象徴として 継続していってほしいです。
③ 感想 前回、町歩きに参加させて頂いて、とても勉強に なりました。今回も参加させて頂いて、とても勉強に なりました。 ④ 消防は、日に行う事はあっても、何に使うのか？ 考えた事もないので、お話を聞いてみました。 ⑤ 消防は、日に行う事はあっても、何に使うのか？ 考えた事もないので、お話を聞いてみました。 ⑥ 消防は、日に行う事はあっても、何に使うのか？ 考えた事もないので、お話を聞いてみました。	① 消防車の 使-方を知れたのが良かった。 ② 消防車の 使-方を知れたのが良かった。 使-方を知ると、残した方が...という!!

消える看板は、何度も見た事はあったので
 すが、今までは何も思わず見過ごしてしまいましたが
 今日、参加させていただき、町のあちこちにあり、
 消える看板の犬やで、使用法など知れて、良いな
 です。初めて見たため、せめて、びくびくしてました。
 これからも、また子供たちと散歩しながら、よく
 見ながら歩きたいです。
 今日はありがとうございました。

消える看板の設置理由や、看板の
 消える看板の使用法を教わりました。
 危険の防止
 マップの地図もわかりやすく、
 シェアリングに興味がありました。
 着いたところから歩いていく所を
 色々の看板がある方と思いました。

3. 長岡市消防団与板方面隊の河内氏・吉村氏からの 街歩きワークショップ終了後のコメント

河内 孝将
 ① イベントの感想
 マップBookに良く作りこまれていたと
 思います。小さい子供もいてイベントに
 楽しい場面もあったかと思いました。
 お疲れ様でした。声が届くぐらいだ
 ので、拡声器があったらよかったですね。
 ② 消える看板の今後
 伝説になってほしい。

子供達には、わかりやすい看板だったと
 思います。イラストもわかりやすいのでした。
 子供達がこの機会に消防の存在を
 知り、関心を持ってくださる良いと思います。
 10年15年後に消防団にようこそと
 らうと思います。
 吉村

7. 参考文献

- [1] 赤瀬川原平・南伸坊・藤森照信（編）：路上観察学入門，筑摩書房，1986.
- [2] 赤瀬川原平（著）：超芸術トマソン，筑摩書房，1987.
- [3] 栞原 清多,伊藤 崇宙,内田 夢乃,久保田 章斗,小山 倖平,砂長 玲南,北 雄介『街歩きを通じた、地図のテーマ設定とデータ収集「よいたあやしいまっぷ」「よいたかわいいまっぷ」製作プロジェクト（その1）』（日本デザイン学会 第67回春季研究発表大会、2020年）
- [4] 伊藤 崇宙,栞原 清多,内田 夢乃,久保田 章斗,小山 倖平,砂長 玲南,北 雄介『街の雰囲気や印象を伝える地図のデザイン「よいたあやしいまっぷ」「よいたかわいいまっぷ」製作プロジェクト（その2）』（日本デザイン学会 第67回春季研究発表大会、2020年）
- [5] 赤瀬川原平（著）藤森照信（編）：考現学入門，ちくま文庫，1987.
- [6] 松村 真宏「フィールドマイニング：人とモノと環境との関係を再構築する試み」（信学技報 HIS2007-3, 13-18, 2007年）
- [7]与板町(発行・編):与板町史民俗編 第一章 地域と民俗 第一節 自然と生活 第一項 地形と民俗 二 沢と溜め池 (2)堤と男ガケ pp.19-20,第一印刷所,1995.
- [8]与板町（発行・編）:与板町40年のあゆみー町村合併40周年記念誌一,笠原印刷所,1996.
- [9]与板町教育委員会(発行):わたしたちの与板町,めぐみ工房,1987 初版. (2003 年改訂)
- [10] 総務省消防庁編:消防団の現状 | 平成30年度版消防白書,2018.
<https://www.fdma.go.jp/publication/hakusho/h30/topics5/38237.html>, (参照 2021-02-01)
- [11] 総務省(編):地方自治制度 | 広域行政・市町村合併,2009.
<https://www.soumu.go.jp/kouiki/kouiki.html>, (参照 2021-02-01)

8. 謝辞

本研究の要であったヒアリング調査につきましては、吉村芳秀氏、河内孝将氏、伊丹一氏、中川周治氏、坂井製作所、石丸良吉氏には貴重なお時間と労力をいただき御協力いただきまして心より感謝と御礼申し上げます。特に吉村氏と河内氏においては、街歩きワークショップにおいても解説や進行補助、開催前の参加者呼びかけなど様々な面でご支援いただきました。ありがとうございました。そのほか、長岡市消防団与板方面隊の皆様、与板消防署の皆様、街歩きワークショップに参加して下さった皆様、街頭調査に回答して下さった皆様など、与板の方々の御協力・御厚意に支えられ本研究を執筆することができました。全ての方に改めて感謝申し上げます。

「きえるかんばんマップBOOK」発行にあたっては、去年の「よいたあやしいまっぷ」「よいたかわいいまっぷ」に引き続き長岡市地域の宝磨き上げ事業様にご協力いただきました。ありがとうございます。

本研究の内容に関して、津村泰範准教授、はこだて未来大学の木村健一教授には適切な助言やアドバイスを頂きました。御礼申し上げます。

また、指導教員である北雄介助教授には、教授が与板在住ということもあり研究指導のみならず様々な面でお世話になりました。教授と奥さんに、改めて御礼申し上げます。北研究室の皆さんには研究に対する議論や日頃の他愛のない話など沢山付き合ってください感謝しています。ありがとうございました。